第22回 森林と市民を結ぶ全国の集い 2018 in 東京

変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」

森の価値を分かち合う

報告書

「ウメコさんの梅干し」2016　©浅野友理子

2018 6.16㊏ – 6.17㊐　上智大学 四谷キャンパス

連携開催 | ソフィアシンポジウム2018

「SDGsの実現に向けて：森の生態系サービスを活かした持続可能な地域づくり」

主 催	「森林と市民を結ぶ全国の集い 2018 in 東京」実行委員会 公益社団法人国土緑化推進機構
後援	林野庁／一般社団法人 日本林業協会／美しい森づくり全国推進会議／ 全国町村会／全国市長会／全国森林組合連合会／上智大学
事務局	特定非営利活動法人 森づくりフォーラム

目　次

開会趣旨・日程 …… 2
開会式 …… 4

全 体 会

基調講演　田中 輝美　関係人口をつくる ～変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」～ …… 5
パネルディスカッション　これからの「森林」と「市民」の関係 …… 9

分 科 会　発表者・コーディネーター・概要報告・学生レポーター報告

第1分科会　【癒やす】都市住民が求める「森の居心地」を探る …… 14
第2分科会　【活かす】森の資源活用の「今」を知る …… 22
第3分科会　【暮らす】山村の価値を世界に開く …… 30
第4分科会　【育む】フォレスト・ラーニング ～森に学ぶ～ …… 36

各分科会報告・まとめ 内山 節・閉会式 …… 44
参加者アンケート …… 46
これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」 …… 52
ソフィアシンポジウム報告 …… 53
「森林と市民を結ぶ全国の集い 2018 in 東京」実行委員　スタッフ名簿 …… 56

開催趣旨

1996年よりスタートした「森林と市民を結ぶ全国の集い」は、これまでに森林ボランティア団体をはじめ、森林に関心のある市民による情報交換などを目的として、1年に1回全国各地で開催し、今回で22回目を迎えます。

この約20年の間に、森林の価値・機能への関心は、国内だけでなく世界的にも高くなっています。国連で採択された、持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成される「持続可能な開発目標（SDGs）」においても、目標の達成には、森林の持続可能な管理の推進が不可欠とされています。

森林率の高い日本では、今、様々なアプローチから森林の価値が見直され、人々の暮らしにおける森林の重要性が再認識されてきています。新たな価値観に基づき、森林や木を活かそうとする動きも各地で活発化しており、山と街との関係は変化し始めています。

森林を取りまく様々な社会的状況が変化する中、山とつながる人々はどんなアクションをしていくべきでしょうか。また、そのつながりを通じてSDGsの達成に貢献できることはどんなことでしょうか。持続可能な社会を形づくっていくために、森林をどう維持・管理していくか、また森林の恵みをいかに活用していくかを市民の視点から考えることが重要です。

今回の「全国の集い」は、都市住民、農山村住民、また双方を行き来する人たちが、これからの森林利用・管理に向けた、ビジョンを共有していくための議論・意見交換の場として開催します。多様に広がる森との触れ合い方・利活用の事例を共有し、多方向に情報が拡散することで新たなムーブメントが起こるきっかけにしたいと思います。

また、森や地域づくりに関わる世界的動向を共有し、関心のある市民をはじめ、研究者や学生などに向けて国内・海外の先進事例を発信し、議論する機会をつくろうという思いから、「SDGsの実現に向けて」をテーマにした上智大学主催の「ソフィア・シンポジウム」も開催されます。「全国の集い」と合わせて実施することで、グローバルかつローカルに展開する持続可能な社会に向けたアクションや意識を、さらに拡大させていくことを願っております。

日　程

6.16 土

13:00 ～ 13:30	**開会式**
13:30 ～ 14:45	**基調講演　田中輝美** 関係人口をつくる ～変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」～
14:45 ～ 15:00	休憩（15分）
15:00 ～ 17:00	**パネルディスカッション** これからの「森林」と「市民」の関係
17:00 ～ 17:30	**各分科会の紹介**
18:00 ～ 20:00	**交流会**

6.17 日

9:30 ～ 12:30	**分科会** 第1分科会「癒やす」 第2分科会「活かす」 第3分科会「暮らす」 第4分科会「育む」
12:30 ～ 13:30	**昼食（1時間）**
13:30 ～ 14:15	**各分科会報告** 学生レポーター発表 まとめ：内山 節
14:15 ～ 14:30	**閉会式**

連携開催　ソフィアシンポジウム 2018

15:00 ～ 17:40	シンポジウム、パネルディスカッション

開会式

開会式

内山　節　実行委員長

梶谷 辰哉　公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事

木下　仁　林野庁 森林整備部 森林利用課 山村振興･緑化推進室 室長

柴田 晋吾　上智大学大学院 地球環境学研究科 教授

関係人口をつくる ～変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」～

田中輝美（たなかてるみ）　ローカルジャーナリスト

東京に地域の情報が届かない

私は大学卒業後、ふるさとの島根の地方新聞社に就職し、記者として15年間勤めました。東京支社に配属になって驚いたのが、東京には地方の情報があまりにも届かない、ということでした。情報がなければ地域に関心を持ってもらうことは難しく、それによって東京一極集中という現象が起きていると思いました。地域から東京または全国に向けて情報やニュースを発信する人がほとんどいないということに気付き、それなら自分で発信しようと新聞社を辞めることにしました。

地域に暮らしながら、地域のニュースを記録、発信する――この仕事をすぐにわかってもらえる肩書が必要だと思い、自ら「ローカルジャーナリスト」と名乗るようになりました。47都道府県にそれぞれ一人は「この地域のことは自分に任せろ」というローカルジャーナリストがいて、全国に情報が届くようになると、ニュースや人、お金が回る循環が生まれ、もっとバランスの良い社会になるのではないかと思います。

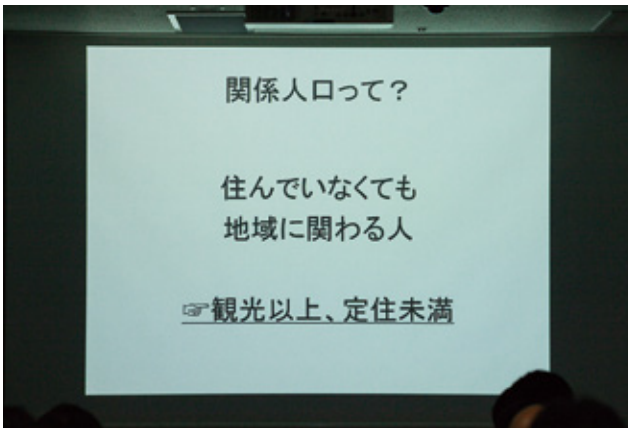
関係人口とはリスペクトし合う対等な関係

「関係人口」という言葉は、『東北食べる通信』編集長の高橋博之氏が2016年に『都市と地方をかきまぜる』という本の中で書いたのが、文献上で最初だと思います。『ソトコト』の編集長の指出さんもこの年に『ぼくらは地方で幸せを見つける』の中で書いていて、いずれにしてもまだ新しい言葉です。一言で言うと「住んでいなくても地域に関わる人」。もっとわかりやすく言うと「観光以上定住未満」。観光というのは、行って観光して地域を見て帰ってくる、という短期的な滞在。それよりは地域に関わるけれど、かといって定住するまではいかない、という人を指しています。

「交流人口」と区別がつかない、と言われますが、例えば、ある地域のイベントに観光客として来場し、

おもてなしをされる人は交流人口です。一方、関係人口はおもてなしされるのではなく、地域の人とテントを建てたり、屋台のラーメンを作ったり、一緒に作業する人たちのことです。

また、ボランティアとの違いは、ボランティアは無償が前提ですが、関係人口については適切な対価を払うことが大切です。対価は必ずしもお金ではなく、例えば終了後の打ち上げで地域の人の手料理をご馳走する、というのでもいい。大切なのは、「ともに地域を作る仲間」という意識で、リスペクトし合うこと。「ともに消費しない」ことも大事で、地域側が来た人を消費するボランティアや、来た人が地域を消費する観光のような「消費の関係」ではない、対等な関係が重要です。



なぜ今、関係人口が求められているのか

今、関係人口が求められている背景には、「前提の変化」「時代の変化」があると思います。人口の変化の予測では、日本は2004年12月をピークに、本格的な人口減少が始まっています。それまで社会全体が拡大と成長を前提につくられてきたけれど、今後は縮小や減少を前提としていろいろな物を作り変えていかないといけない。それが「前提の変化」です。

また、地方への関心が高まり、地域の役に立ちたい、人の役に立ちたい、という若者が増えてきています。都会でのキャリアを捨て、わざわざ島根に移住してきた若者に理由を尋ねると「島根に魅力があるから」と答え、さらに「課題があったから」と言うのです。今まで課題というのは克服しなければならない、と否定的な捉え方をされるものだったのですが、彼らは課題があるからこそ自分が関わることができ、自分の役割がある、「関わりしろ」が多いと捉えているのです。ですから、むしろ課題を認識し、「そのためにあなたが必要だ」というメッセージに変えれば、興味を持つ人は必ずいる、そういう「時代の変化」が関係人口を求めていると感じています。

求められる「第三の道」

時代は変わりましたが、地方と都市の関わり方を見ると、以前の延長線上で変わっていないと感じています。移住や定住について、地方から見ると、定住人口の奪い合いをしている。一方、都市の人から見ると、移住や定住はハードルが高い。何か役に立ちたい、という思いがあるのに、住んでほしい、と言われることで関われず、力が生かされないというのはあまりにももったいないと思います。

交流や観光も多くの自治体で行われてきましたが、結果的におもてなしする側・される側に分かれてしまう構造になり、地域側の「交流疲れ」も報告されています。また、観光ではお金を使って消費する関係になってしまい、魅力を感じることができないと思います。

そのような現状の中で、移住・定住、交流・観光でもない「第三の道」として、関係人口があるのではないでしょうか。離れていても、観光よりは地域に関わる、でも定住はしない、外にいる仲間。どの地域も増やすことができ、都市の人も力を生かすことができる、双方にとってWin-Win の仕組

みです。

移住者に対し、「地域に馴染め」とローカル的圧力をかける地域や、消費によって地域の経済活動を活発化させる観光客のように、強い立場や上下関係を作るのではなく、関係人口は、地域とそこに関わる人の対等で互恵的な関係が大切で、その関係性の実現というのは日本社会にとってイノベーションになり得るのではないでしょうか。

関係人口の関わり方

では、関係人口にはどんな関わり方があるのでしょうか。「買う」「行く」「働く」という関わる人の行動の分け方がわかりやすいです。その関わり方は色の「グラデーション」のようですが、濃いから良い、薄いから駄目、ということではなく、自分なりの関わり方であればいいのです。

「買う」には地域の農作物や特産品をインターネットや東京にあるアンテナショップで買うほか、ふるさと納税やクラウドファンディングによって地域の取り組みを応援する、というのもあります。「行く」については、地域に遊びに行って現地の人と仲良くなって通うようになる、被災地のボランティアとして何度も足を運び、地域の祭りやイベントに参加して運営を支えるなど、いろいろな可能性があります。また、「働く」というのは、地域に本社がある企業の東京支社で働く、東京にいながら地域の会社とビジネスをする、などの形もあります。

しかし注意すべきなのは、関係人口にとって移住・定住はゴールではない、ということです。ゴールではないけれど、否定しているわけではない。住むか住まないかが大事なのではなく、地域の「力」になっているかが大事なのです。

その「力」とは、人、物、お金、アイデアを地域に呼び込んでくれることだと感じています。地域の再発見や誇りを取り戻す効果があるなど、学術的にも、よそ者には力があるということが報告されています※。ですから、力になりたいと思っている人に、その力を発揮してもらうことが大切なのです。

地域をつくるのは地元の人です。しかし、よそ者が来ることで刺激になり、地域の人がエンパワメントされて元気になれば、地域も活性化するのです。一緒に住まなくても、一緒に作っていくということが新しい時代では意味がある、と思います。

ハードではなくコミュニティの関係案内所

では、どうやって関係人口を作り出していけばいいのか。これまで地域には観光案内所がありましたが、今は「関係案内所」があることが関係人口が生まれることにつながるといわれています。

島根県は、2012年度から「しまコトアカデミー」という講座を主催しています。半年間で連続7回の講座のうち6 回は東京での座学、1回は2泊3日で島根に短期インターンシップに行きます。東京で開講しているにもかかわらず、「移住しなくてもいい、でも学んで地域に関わってほしい」とうたっています。

参加者は20～30代が中心で、大きく3パターン

に分かれます。一つは島根が好きかどうかは関係なく、古里が欲しい「ふるさと難民」。そして「いつかは島根県に」というUターン希望者。さらに、人生に悩み、迷っているという「もやっとピープル」。いずれも全員が島根に縁もなく、「何でもいいよ」というような人たちです。

講座を終えた5期生までに、島根に関わる活動をしているか、アンケート調査したところ、58.8%が「活動している」と答え、うち半数近くは島根に移住しなくていいと言われているにもかかわらず、結局は島根に移住して活動しています。また、首都圏で活動している人たちは、東京のおいしいパン屋と組んで東京から通ってパン祭りを開いたり、東京にいながら島根の企業のブランディングを手掛けたり、それぞれのやり方で関わっているのです。

関係案内所というのは、観光案内所のように新しいハードを作る必要はなく、コミュニティです。関わりたい人たちが、そこに役割があることが大切なのです。

時代は変わり、何かやりたい、と思う人たちがたくさんいます。その人たちを生かすか生かさないかは地域次第、そういう時代になってきたと思います。

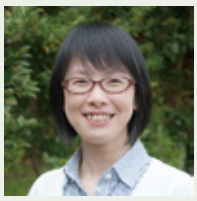
関係人口に選ばれる地域とは

最後に、どんな地域が選ばれて関係人口として人が来てくれるのか。それは、人が魅力的で生き生きしていて楽しい地域だと思います。そのため、まず自分が地域を楽しむことが地域に求められます。「ここには何もない」「つまらない」「人口が減るから仕方がない」というのは禁句です。

人口減少時代とはどんな時代でしょう。多くのプロジェクトを成功させている離島の隠岐郡海士町（あまちょう）では、地域の人たちは「海士町というボートに客はいない」と言います。おもてなしをされるだけの客は不要で、オールをこいだり、マストを上げたり、小さいことでもいいから誰もが役割を果たさなければ、海士町というボートは沈んでしまう、ということです。

同様に、誰もが関係人口を生み出し、増やし、自分自身もどこかの地域の関係人口として役割を果たすことができる。これからはそんな時代だと思うと、何だかわくわくしませんか。

※敷田麻美（2009）よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究



たなかてるみ
田中輝美
ローカルジャーナリスト

ローカルジャーナリスト。島根県浜田市生まれ。大阪大学文学部卒業後、山陰中央新報社に入社。2014 年退社し、独立。著書に『関係人口をつくる―定住でも交流でもないローカルイノベーション』（木楽舎）『ローカル鉄道という希望―新しい地域再生、はじまる』（河出書房新社）など。2017年大阪大学人間科学研究科修士課程修了。

これからの「森林」と「市民」の関係

パネラー

いとうひろし
伊藤 洋志

仕事づくりレーベル「ナリワイ」代表／
全国床張り協会 会長
https://nariwaibook.tumblr.com/

京都大学農学研究科修士課程修了。遊びと仕事が一体化した頭と体が鍛えられる仕事をテーマに、ナリワイの開発と実践を行う。遊撃農家などの個人事業形態の開発実証を行う他、ギャラリースペース・シェアアトリエや「全国床張り協会」といったギルド的団体の運営も行う。著書「ナリワイをつくる」（東京書籍）は、韓国でも翻訳出版された。

てづかさやか
手塚 さや香

釜石地方森林組合／釜援隊
http://kamamorikumi.jp/

全国紙記者を退職後、2014年より岩手県釜石市の復興支援員組織・釜石リージョナルコーディネーター協議会所属。釜石地方森林組合に派遣され人材育成事業「釜石大槌バークレイズ林業スクール」の立ち上げや、東日本大震災で被災した山林所有者を支援するための植樹活動のコーディネートなどを行っている。

もりたあかね
森田 朱音

株式会社おおち山くじら 代表取締役
http://yamakujira.jp/

福岡県福岡市出身。九州大学大学院農業資源経済学科修了後、マーケティング会社で地域づくりのコーディネート業に従事。2014年に島根県美郷町に地域おこし協力隊として移住。獣害対策をきっかけに地元農家が立ち上げたイノシシ肉の事業を継承し、2017年に(株)おおち山くじらを起業。現在3名の移住者でイノシシ肉の製造販売を行う。

コーディネーター

さしでかずまさ
指出 一正

月刊『ソトコト』編集長
http://www.sotokoto.net

1969年群馬県生まれ。上智大学法学部国際関係法学科卒業。雑誌『Outdoor』編集部、『Rod and Reel』編集長を経て、現職。島根県「しまコトアカデミー」メイン講師、高知県文化広報誌『とさぶし』編集委員、静岡県「『地域のお店』デザイン表彰」審査委員長、奈良県「奥大和アカデミー」メイン講師、奈良県下北山村「奈良・下北山 むらコトアカデミー」メイン講師、長野県長野市WEBメディア『ナガラボ』編集長、福井県大野市「越前おおの みずコトアカデミー」メイン講師をはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。まち・ひと・しごと創生本部「わくわく地方生活実現会議」委員。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。趣味はフライフィッシング。

コメンテーター

うちやまたかし
内山 節

森林と市民を結ぶ全国の集い 2018
in 東京 実行委員長
哲学者　森づくりフォーラム代表理事
https://www.moridukuri.jp/

「森林と市民を結ぶ全国の集い2018 in 東京」実行委員長。1970年代から東京と群馬県上野村の二重生活を続けながら、在野で、存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思想を展開する。著書に『新・幸福論　近現代の次に来るもの』『森にかよう道』『「里」という思想』『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』『戦争という仕事』『文明の災禍』『内山節著作集』全15巻　ほか。

関係人口を増やす視点

指出　『ソトコト』という社会と環境を考える雑誌の編集長をやっています。まずは、各自自己紹介をします。今はいろんな委員もやらせてもらっています。まち・ひと・しごと創生本部の一部の会議の委員もやっていますが、6月15日に「まち・ひと・しごと創生基本方針2018」が閣議決定されましたが、その中に関係人口という造語が盛り込まれました。言葉を作って叩かれたり褒められたりしないと、物事は前に進まないと思っています。だから関係人口や関係案内所という言葉を僕はひたすら言って結果的に国が認めてくれました。

関係人口が一方的に増える土壌はありません。僕たちが努力しなければいけない二つの視点があります。一つは、関係人口を作るための関係案内所をつくることです。観光案内所をもっと違う形に進ませるタイミングです。もう一つは関係人口を迎える人たちをその地域で育てなくてはいけない。「うちには若者がいない」という人がよくいますが、高校生が街づくりをやっている例もあるので中学生や高校生でもいい。知らない人が喜んでくれることをやってみたいという気持ちが働きます。そういう気持ちを育てないといけません。

生業を考案し実践

伊藤　いろいろなことを自給して、仕事をつくるということをやっています。しかし何でももうかればいいというのではなく、人間と自然との関係性をどう考えるか、人間が自給できるようになるのがいいのでは、というのが大きなテーマです。一つの仕事で生活を成り立たせるのは無理があるので、5、6個の仕事をやりくりしながら年間通してみたらいいのでは、という作戦でやってます。

左から指出さん、伊藤さん

その一つが全国床張り協会。地方に行くと家が不足していて、家が見つかっても床が腐っている。そこで、床を張ります。木造建築のいいところはいろいろな人が参加できるところで、そこが人間関係を作る場になります。

イノシシと共存する地域

森田　島根県邑智（おおち）郡美郷（みさと）町、島根県の真ん中、山間の集落に人口4,300人がいますが、移住した4年前には5,300人だったので、すごい勢いで人口が減少しています。

私は福岡市内出身ですが、昔から田舎に関心をもっていて、東京で地域活性のコーディネートをするようなコンサルティング会社に勤めました。でも、お金がないと何もできない不安、焦燥感を感じました。田舎暮らしを少し試してから、自分で何か興せる場所がほしいと移住できる場所を探し、縁もゆかりもない島根県美郷町に、2014年からは地域おこし協力隊という総務省の制度でまず3年間、その後昨年9月に会社を興しました。

補助金に頼らず、自分の手で生業をつくりたいと考え、地元の人がやってたイノシシの事業に関わることになりました。15年前から地元の人がイノシシを捕獲、食肉処理場で肉にしてイノシシ肉の製造・販売をしていましたが、地元の人がボランティアベースでやっていました。それを事業化してほしいということで「おおち山くじら」を立ち上げました。首都圏のレストランを中心に肉を通年販売するほか、地元の人のレザークラフト商品も販売しています。そもそもイノシシを取ることが目的ではなく、イノシシとの共存を目指すためにどうするのか模索していて、誰でも関われるような仕組みづくりを心掛けています。

左から手塚さん、森田さん、田中さん

三陸の山林を活用したつながりの拡大

左から手塚さん、森田さん

手塚　埼玉出身で、毎日新聞社に入り、たまたま盛岡に4年、その後、東京と大阪に勤務。現在、岩手県釜石にいます。大阪にいた2011年に東北大震災が起こり、ボランティアや取材で通いましたが、もっと直接的に復興や岩手・釜石の地域づくりに関わりたい、と思うようになり、2014年秋に転職しました。

釜石リージョナル・コーディネーター協議会（通称：釜援隊）の隊員です。釜援隊のメンバーは現在20～60代の16人で、釜石市内のいろいろな組織に配属されています。私は釜石森林組合に配属され

ています。関係人口拡大のような活動もしています。釜石地方森林組合は、15年前からバイオマス発電の供給をしていたり、全国的にも新しい取り組みをしています。

年間500人の視察や体験活動を受け入れています。企業に継続的に釜石に通ってもらいたいということで、植樹はよくありますが、伐採した後、整地して植林して夏に下刈りをするという年間通じたサイクルで活動してもらっています。森を通じた関係人口拡大のメリットとして、山の仕事は年間通じてあるので、リピーターになってもらいやすい。林業関係者や山主と交流することによって、地域の人にとっても刺激になっていると感じています。

関係人口はいいことか?

指出　ではここからディスカッションですが、関係人口というのは、そんなにいいことなのでしょうか。その存在は、中山間地域の幸せにつながるのでしょうか。

内山　学問で言葉を作ると概念を確定しようとするんですね。それは、多くの場合、大事なことを消してしまうということになるので、日本の伝統的な考え方というのは、一番大事なことは説明できないという立場を取ってきたんです。だから、自然とは何かというのは説明できない。ただ捉え方としては、自然というのは、自然自身が関係し合うもの、関係し合うものこそが自然であるという、向き合うと抽象的で、具体的なことはわからない。だけど、そういうものを大事にしようというのが、日本の自然思想です。関係人口も、根本的にはあまり説明しなくても良いと思います。移住一歩手前の観光人口だと思われることもあり、そういう、幅広いものでしょう。

もともと山村というのはいろいろな人たちが付き合って成立している地域なんです。それが、高度成長期以降、付き合いがなくなり、閉じ込められたものになってしまった。だから、今、またいろいろな付き合いを回復していくという時期に来ていて、それが関係人口といってもいい。

左から森田さん、田中さん、内山さん

指出　関係人口の定義をいただき、背中を強く押してもらった気持ちです。

田中　人口減少地域や、農山村で共通しているのが、人口が減ったり、日本が近代化していく中で、傷ついたりという経験で、そこに対して関係人口というのが関わってくる。関係人口がやって来たからといって、すべて幸せになるというような簡単なものではないんですが、傷ついてきたという中で、新しい人たちが関わったり、力になったりしてくれることで、農山漁村に住んでいる人たちが、もう一回頑張ろうと思える、そういう人の心の回復にも役立つと思います。もちろんこの複雑化した現代社会の中で、関係人口が一人できたからといって、すべての地域の課題が解決するというものではないですが、今まで人が流出することしかなかった所で、新しい人が、新しいやり方で関わってくれることで、自信や誇りが回復される意味は大きいと思っています。

森と町を人の流れでどう近づけるか

指出　森と町をどう、人の流れを作って近づけていくか、ということですが、森に興味がないけれど、森に出会ったらきっとすごく好きになってくれるという人に、どう気づいてもらえるのか。田中さん、例えば森と人が近づく、若い人に林業や農山村についての魅力をわかってもらうには何が最適でしょうか。

田中　移住してもらう以外で、都会で、暮らしながらできることを考えるのがいいと思います。例えば、食と林業。食は大きなテーマになるでしょう。食から入って、その中でグラデーションが濃くなっていく。森について考えるようになる。都会のライフスタイルの中で見つけていく。

田中さん

これからの森林と人との関係

指出　これからの森林と市民の関係はどうなるのがいいでしょうか。

伊藤　水や食べるものなど、自ずとどこかでつながっています。森は自ずとたどり着く場所だと思います。

手塚　山から出た木材が消費者の手元に届くまでの流通は、農業と比べてわかりにくいです。山に入るのは楽しいけれど、消費や使い方にも関心をもってもらうと日本の林業も変わっていくと思います。

森田　山の中に住んでいるので、山を育てている人たちと向き合おうと思いました。そしてそれを伝えていきたいと思っています。

指出　森と市民の関係が遠くになっている今ですが、関係人口というキーワードのもとで、中山間地域との手触りを感じている人も増え、距離は縮まっています。

田中　森はなくてはならないもの。食べ物、水、日本全体のもの、エネルギー、環境など。大切で切り離されてはいけないものなのに、分断されていることに改めて気付きました。普段森から離れてしまっている人と森とのつながりを、一人ひとりが広めることの積み重ねで変わっていけるのでは、と期待や希望が持てました。

内山　伝統回帰の時代だと思っています。自然信仰もそう。普通に受け入れていっていいと考えている人が増えてきている。突き詰めたらそうだと理解する話ではなく、自然は尊敬しておいた方がいいというような考え方、これも伝統回帰でしょう。関係人口とも関係してきますが、戦後の日本は、自分を利する自利の時代。しかし、最近は利他の時代。他人のために我慢してやるのではなく、自分のやりたいことが他人のためになる。他人の中に自然も含めていい。そういうことを求める若い人が増えています。自分がやりたいことが自分に返ってきて、さらにみんなのためになる、利他という伝統的な考え方がいつの間にか戻ってきているのです。

具体的に森や山とつながっている、だれかとつながっているという考え方もあるけど、東京のど真ん中にいても森とつながっている、場合によっては海外の自然とつながっている。そういう見えない大きなつながりの中に生きている。そうすると森とのつながりは、具体的なつながりを持つ人もいれば、間接的なつながりという人もいる。または、思いはつながっているという、そういうのが裾野をつくっていく。いろいろなつながりがあってこれから展開するのではという気はしています。

都市に住まう人びとは森に向かう理由を「癒やされるから」だといいます。「癒やされる空間」とは どんなところでしょうか？この分科会では、森林の「居心地」について、樹木葬、森林療法、タイニーハウスなどの事例をヒントに、幅広い観点から考えてみたいと思います。

ウエスギセイタ

YADOKARI株式会社 代表　http://yadokari.net/

住まいと暮らし･働き方の原点を問い直し、これからを考えるソーシャルデザインカンパニー「YADOKARI」。暮らしに関わる企画、不動産･タイニーハウス開発、空き家･空き地の再活用、まちづくりイベント･ワークショップなどを主に手がける。著書に「ニッポンの新しい小屋暮らし」「アイム･ミニマリスト」「未来住まい方会議」「月極本」などがある。

上田 裕文（うえだひろふみ）

北海道大学　観光学高等研究センター 准教授
http://www.cats.hokudai.ac.jp/staff/1045/

東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻修了後、ドイツ学術交流会（DAAD）奨学生としてカッセル大学建築･都市計画･景観計画学部、都市･地域社会学科にて経済社会科学博士(Dr.rer.pol.)を取得。札幌市立大学デザイン学部を経て現職。専門は風景計画。著書に、『The Image of the Forest』（Sudwestdeutsche Verlag fur Hochschulschriften、2010）、『まちづくりのための北のガーデニングボランティアハンドブック』（共著、北海道大学出版会、2014）他。

降矢 英成（ふるやえいせい）

精神科･心療内科 赤坂溜池クリニック院長／NPO法人日本森林療法協会
http://www.holisticmedicine.jp/　http://blog.canpan.info/jfts/

1959年生まれ、東京都出身。東京医科大学卒業。NPO法人日本森林療法協会理事、NPO法人日本ホリスティック医学協会会長。人間を身体だけでなく、body-mind-spiritの視点からとらえる「ホリスティック医学」を理念とするホリスティック医療の実践の場として1997年赤坂溜池クリニックを開設。「森林養生プログラム」にも取り組み、自然治癒力を高めていく活動等も展開中。

コーディネーター

赤池 円（あかいけまどか）

有限会社グラム･デザイン 代表取締役／私の森.jp 編集長
https://www.gram.co.jp/　https://watashinomori.jp/

1991年オレゴン州立大学を卒業後、ITベンチャーに入社し、クリエイティブ･ディレクションを担当。インターネットの普及を背景に、ウェブデザインの発信力に未来を感じて独立。1998年グラム･デザインを設立し、現在に至る。森林の多面的な価値を社会に役立てたい思いで、日本の森情報を紹介するウェブサイト「私の森.jp」の立ち上げに関わり、編集長を兼任。

小野 なぎさ（おのなぎさ）

一般社団法人 森と未来 代表理事　https://fwithf.org/

東京農業大学 地域環境科学部 森林総合科学科卒業後、企業のメンタルヘルス改善に関わる事業に携わり、認定産業カウンセラー、森林セラピストの資格を取得。約10年間で、森林を活用した研修プログラムの開発、健康リゾートホテル事業、海外のメンタルヘルス事業の立ち上げを経験。2015年に一般社団法人森と未来を設立、森林を活用した企業研修や地域支援を行なっている。著者に『森ではたらく！27人の27の仕事』がある。

報告

あかいけまどか
赤池 円
私の森.jp編集長

登壇者の発表

この分科会では、樹木葬、森林療法、タイニーハウス／トレーラーハウスの事例を通して、人が「癒やし」を求めて森を訪れることの先にある、森林の空間利活用について、その新しい可能性を探った。

北海道大学の上田裕文先生からは、ほぼ同時期に始まったという日本とドイツの樹木葬についてお話しいただいた。樹木の元に死者を埋葬する行為は昔話などで馴染みがあるが、実は樹木葬墓地の歴史はまだ20年にもならない。当初、樹木葬は森林を保全する目的で始まった事業であったが、その後日本では公園のような墓地の墓周りに花木を植えるスタイルが主流となってしまった。ドイツの樹木葬墓地には目立つ墓標がなく、一見普通の森と変わらない。手の入った森は誰でも訪れることができて、森林浴やピクニックが可能だ。

近年は少子高齢化と家族構成の多様化を背景に、墓じまいが1つのブームとなっている。また、首都圏集中型の人口構成が「ふるさと難民」を生んでいることから、地域の森に樹木葬墓地を開くことで、都市住民を呼び、心のかよう「ふるさと」として新しい関係性を創出する可能性がある。森林の墓地利用は次の世代と森の価値を分かち合うことでもある。

上田 裕文さん

赤坂溜池クリニックの降谷先生からは、「医療」「治療」「セラピー」「トリートメント」「ケア」「養生」など関係用語の曖昧さについて整理をしていただいた上で、具体的なデータを介して森林療法の効果や考え方についてお話しいただいた。森林療法とは森林の地形や自然を利用して、健康の回復を目指す医療・リハビリ・カウンセリングなどのことをいう。森林療法は、心と身体の双方に影響を与え、自律神経、ホルモン、免疫などの不調を

改善するのに役立つ。西洋医学の薬はプラスかマイナスか一つの方向への強い影響力を持つが、森林空間のもたらす効果のユニークなところは「過剰」な部分を取り除く「バランス」への調整機能である。ゆえに、森林療法はホリスティック医学との親和性が高い。悪い箇所（部分）を治すことに集中するのではなく、人生観をも含めたその人の「全体性」のありように、その時々の最良なバランスを求めて「成長する」こと、「前よりも良くなる」ことを目指す医療である。

降矢 英成さん

YADOKARI代表のウエスギセイタさんからは、縮小した家族単位を背景に、小さく住まうこと、動かせる家を持つこと(動産)によって広がる新しい可能性についてお話しいただいた。欧米を中心に、ダウンサイズすることで得られるより自由な住まい方が注目されている。#VanLifeは居住用に改造した車で旅をする人たちからの発信を集める、Instagramのハッシュタグ。太陽光発電とバイオ下水処理技術を搭載した完全オフグリッドなキャンピングカーも登場した。インターネット上でシェアされる設計図をダウンロードし、デジタルカッターに切らせたパーツで組み立てる家はプラモデルのよう（ハーフビルド）で、わずか1日で組み上がるものもあるという。こうした住まい方を求める人びとに共通する指向性は、自然回帰だ。自然に負担をかけずに、自然と自由に動ける必要最小限の居住空間を自然の中に創る。自由は豊かさの象徴でもある。「どう生きるか」は「どこに住むか」から解放されていく。現代は「幸せ」を再編集する時代なのだと言うウエスギさんのコメントには説得力がある。

ウエスギセイタさん

コーディネーターからの発言

人はなぜ「癒やされに」森に行くのか、森林空間の魅力を探っていくにつれて、いろいろな可能性が見える。これまでの森林・林業の考えを変えようとするのではなくて、少し距離を置き新しい価値観を受け入れることが必要だと感じた（小野なぎさ）

家や土地、社会の慣習や常識などにとらわれて、これまでは難しいと思っていたことも、新しい視点やコミュニティの力を借りてなんとかできる時代になってきた。これは森林という自然資源が残されているからこそ。わたしたちには自然に対する絶大な信頼がある。自然を求めて何かを起していくことは、現代の閉塞感や違和感を解消することにつながっていくと思う（赤池円）

参加者からの発言

亡くなった親族のもつ森林（愛媛）が手付かずになっているが、今回の事例発表を受けて、どんなことが考えられるか聞いてみたいという問いかけに、愛媛に縁のある他の参加者から県人会のグループに相談してみたらどうか、という具体的なアドバイスがあった。また、別の参加者からは東京にいても、地域の人がつながるネットワークを持って、その利活用を考えていくことも有効じゃないか、というコメントが続いた。

他には、実家の親戚の畑の隅に6帖の小屋を自作した人の事例紹介があった。わずか36万円の建築キットを買って、デッキとソーラーパネルも取り付けたが、自分で工夫して作ることは精神的にも健康であると笑っていた。ウエスギさんから「素晴らしい!」のひと声も。

筆者の感想

これからの人と森林の関わり方において、具体的で新しい視座を提供する分科会であったように思う。次の世代に美しい森や故郷を残すための墓苑事業は、都市と中山間地との関係性を結びなおす、新たなふるさとの創生になり、集団就職で上京した世代の孫たちが再びふるさとに帰るきっかけにもなるだろう。そのためには、現在主流だという都市型公園墓地ではなくて、残したい森をこそ墓地として利用したい。ドイツの樹林墓地では森林管理官が契約希望者を案内するという。自然は宗教の始まる前にあって、人が還るべきところでもある。
森林療法の興味深いところは自律神経やストレスホルモンの「調整機能」に着目しているところだ。人体は非常に複雑なネットワークが互いに連携して機能しているから、どんな疾患であっても「ここ（だけ）が悪い」と病因を絞ることはできない。ホリスティック医学はともすると異端とされがちだが、近年になって、全体(性)は本質に近い、ということが様々な分野で言われ始めている。森林空間がもたらす健康への「調整機能」はもっと積極的に医療の現場で利用されてもいいのではないか。

タイニーハウス／トレーラーハウスの話題は、楽しく刺激的であった。人が家や土地の束縛から自由になることは、社会や経済の流動性を劇的に高めることにつながる。「富山の薬売り」のように、生きた情報を持った人たちが日本中を移動しながら住み歩いていけば、閉塞する中山間地域への刺激となるだけでなく、新たな市場が創出されるかもしれない。水が沸騰するのは、分子が激しく運動するからだ。伝統や文化は土地の人によって、土地に記憶されるが、一方でタイニーハウス／トレーラーハウスで移動する人びとは、インターネットにも繋がっていて広い世界に地域の魅力を伝える役割を担うだろう。地域の森林に、こうした短期居住希望者がハウスを置いて自由に生活できる場所を提供してみることで、新しい世代と新たな関係性が紡がれ、新鮮なアイディアの「沸騰」が生まれることを期待する。そしてまた同時に、こうした時代の変化によって大切な価値が失われることなく、新たな学びの種となるように考えていきたいと強く思った。

学生レポーター報告

広岡 佐和子
（東京環境工科専門学校　自然環境保全学科）

発表者

上田 裕文さん

墓地の承継問題の解決、自然回帰のシンボルとして生まれた樹木葬。日本はお墓に木を植えたりする形であるのに対し、日本と同時期に樹木葬の流れが生まれたドイツでは、森をそのまま利用する。そこは周りの樹林との境目がほぼなく、一般利用も。お墓参りをピクニックに変え、地域づくりにつなげている。樹木葬の課題は、関係者皆が自然を知ること。また樹木葬は、生前の安心、故人と遺族が出会う、後世への環境遺産、人口流動社会におけるふるさと、などの役割がある。日本の樹木葬は今後この視点を持つべき。

降矢 英成さん

薬で一時的に症状を抑えるだけではなく、ホリスティック(全体的)な視点で、自然治癒力をいかしライフスタイル改善やセルフケアを行う際、自然療法、森林療法を用いる。自然系療法は、高い人は下げて沈静化、低い人は上げる調整ができる。森林療法は、森林浴、森林レクリエーションを通じた健康回復、維持、増進活動。森林療法では、五感を使い、ウォーキング→気功→自然観察等→最後にソロの癒しタイム、というように、森林慣れをしながら進める。最終的にその人の人生観を見つめ成長することを大きな目的とする。

ウエスギ セイタさん

1～2人暮らしが増える今、ダウンサイジングした住まい方に注目する。タイニーハウスは、大人2人で安価に自分たちで建てられる。動産では太陽光発電、バイオ下水処理等のオフグリッド技術が考えられたり、デジタルカッターを使うハーフビルドが間伐材利用に使われるなど、テクノロジーは自然と切り離されていない。キャンピングカー等に居住移動するVanLife、SNSで集まりリアルで小屋をつくるコミュニティービルドなども若手世代で広まり、生き方、豊かさ、幸福の意味を再編集する過渡期にいる。

参加者

印象に残った発言

1. 亡くなった親族の土地に森林があり、手つかずになっているが、どんなことが考えられるか。→（同じ県の参加者の方々より）県人会のグループに相談してみては。地元にゆかりのある人とのつながりを東京でも作っておくのが良いと思う。
2. （タイニーハウスの話題から）小さな小屋を実家の親族の畑の隅に作った。安く、思わず買ってしまった。ソーラーパネルも譲り受け設置。自分でやることが精神的にも健康的だとわかった。

コーディネーター

まとめ的な発言

- これまでの森林林業の考えを変えるのでなく少し置いておいて、新しい価値観を受け入れることが必要だと感じられるお話だった。
- これまでできないと思っていたことが、新たな視点やコミュニティによって、何とかなる、できる時代になってきた。これは皆さんの、自然に対する絶大な信頼があるからですよね。そしてこれが現在皆が抱える閉塞感、違和感を解消することつながっていくと思う。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

1. 降矢先生、ウエスギ先生のお話は、ともに人生観を見つめなおすものであり、たとえば森林療法の発展的プログラムとして、森林の中でのタイニーハウスづくりなどを取り入れることもできるのではと考えた。
2. お三方のお仕事は関係人口を推し進めると感じた。都市から郊外に出向き森林療法を行う、都市の人が郊外の樹木葬の場所とつながる、タイニーハウスで2拠点をもつなど。
3. SDGsの「11.住み続けられるまちづくりを（都市、都市周辺、農村部の良好なつながり）」および「12.つくる責任使う責任（自然と調和したライフスタイルの意識）」に関わる議論だった。
4. 森を知り、守るという視点に加えて、森を自分の生活や人生の中でどう位置づけるのかという視点をもち、その楽しさ、精神的豊かさ、について周りにビビットに言葉や形で伝えられるようになりたい。

学生レポーター報告

二又 徳子
（兵庫県立大学大学院　緑環境景観マネジメント研究科）

発表者

上田 裕文さん

ドイツの事例から日本の現状の樹木葬の形ではなく、森もお墓ももっと身近なものにするというコンセプトの下、新たな価値観を提唱。お墓参りをピクニックに！お墓を作った場所をふるさとに！地域づくりとして樹木葬墓地をつなげていくことが森の新たな活用につながる。

降矢 英成さん

ホリスティック医学の考え方に基づいた森林療法の視点から、人の心と体にとって大事なことは医学的な治療だけでなく、森に入り、森に触れることで人生観・世界観を内省し、自己の成長モデルにつなげていくことであり、それには、繰り返し森に足を運び、自分と森との良い関わりをつくることが大事である。それが強いては森の活用へとつながっていくはずである。

ウエスギ セイタさん

簡単に誰でも作ることができるタイニーハウスという家を通して、自分にとって豊かさとは何だろう！と考えることで、自分のライフスタイルを見つめ直し、豊かさを再編集していく時代となってきている。それは、どういう暮らしをしたいか、人それぞれのライフスタイルに合わせ、おのずと自然との距離間を考えるきっかけとなるはずである。

参加者

印象に残った発言

- 癒しを求めて森に足を運ぶには移動距離の問題がある。
  ⇒ 癒しの継続には、自然に触れる回数を増やすことが重要であり、自然に触れることは森でなくても、近くの都市公園でもできる。日常は近くの都市公園へ、まとまった時間のあるときには遠くの森へといった組み合わせができれば、癒しの効果を持続できる。
- 家を建てようとする際、土地を買うか買わないかという問題に必ずぶち当たる。
  ⇒ 今、土地が欲しいが高くて買えない人がいる一方で、相続の問題などで土地の取扱いに困っている人がいる。お互いに足りないことを補え合えば、Win-Winの関係で幸せになれるはず。

コーディネーター

まとめ的な発言

私たちができないと思っていたことが新たな視点やコミュニティによって何とかなる、できる時代になってきた。それは、自然に対する絶大な信頼があるからこそである。自然を求めて、何か行動を起こしていくことは、閉塞感、違和感を解消することにつながり、それは、地球レベルで調整機能が働くことへとつながっていくはずである。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

- 人の心と体を整えるためには、森という媒介を通して人生観・世界観を内省し、明日の自分につなげて行くことが重要である。
- 自分にとって豊かさとは何だろう？と考えることは、自分の生き方を見つめ直す良いきっかけとなる。
- 森を活用するヒントは、我々の何気ない日常生活の中に隠されているのではないかと感じた。

高度成長期以降、それまで自然とともに歩んできた日本人の営みが大きく変わり、日本人が本来持っていたはずの大事なものをいろいろと手放してきたように思う。しかしながら、ここに来て、自然への原点回帰の機運の高まりを感じ、森だけではなく、ヒトの暮らしに寄り添った森の利活用を考えるとともに、今後、様々なニーズに合わせ、森とヒトを、ヒトとヒトをつなぐ、好奇心のトビラへと導ける活動につなげていきたいと思う。

全体会を通しての所感（初日基調講演を聴講して）

一昔前までは、ヒトの営みの中で、森（里山）は衣・食・住のホームセンターのような役割を担っていたのではないだろうか。我々の日常生活に森を当たり前のように組み入れることで森がもっと身近な存在になれば、物理的な距離は遠くても、自然と距離は縮まり、関係人口が増え、活性化していくのではないかと感じた。

森の資源活用形態が木造建築、紙製品に加え、民間施設での空間利用やバイオマスエネルギーとして熱・電利用など多様化しています。その変化について山、ひと、街の視点から今後どんな可能性があるのか、私たちは何ができるのかを考えます。

おおのこうすけ
大野 航輔
株式会社リトル･トリー代表取締役
https://www.little-tree.biz/

2013年に山梨県道志村へ地域おこし協力隊として移住。森林整備とバイオマスエネルギー利用のプロジェクト運営を行う。任期終了後、（株）リトル・トリーを設立し、道志村の民有林整備を林業、バイオマス、観光の分野から追及している。

すずきしょうじ
鈴木 正樹
株式会社ハルキ取締役 企画･開発部長／木育マイスター道南支部／
日本全国スギダラケ倶楽部道南支部　http://mori-haruki.co.jp/

1972年埼玉県生まれ。北海道青年林業士、北海道認定木育マイスター、森林評価士。2007年に(株)ハルキに入社。製材・プレカットの営業のほか、家具・遊具・準不燃木材の企画・開発などに取組む。日本全国スギダラケ倶楽部の道南支部長として、道南杉を活かした街づくり、多様な木質化プロジェクトを展開、産学官連携病院木質化プロジェクトでは2016年ウッデザイン賞優秀賞林野庁長官賞を受賞。

たごえいじ
田子 英司
いわき市森林組合　代表理事組合長

昭和53年　東京農業大学林学科を卒業後、家業の農林業に従事。
自伐林家として経営するが、材価の低迷による経営の不安定な状況を克服する為、丸棒加工機を導入し緑化木の販売も加える。平成25年３月より現職。

コーディネーター

さかもとゆき
坂本 有希
一般財団法人地球･人間環境フォーラム

2002年に国際環境NGO FoE Japanとともに「フェアウッド・キャンペーン」（現在はフェアウッド・パートナーズ）に改称、http://www.fairwood.jp）を立ち上げ、日本の木材市場をフェアなものにする活動に取り組む。一貫して日本で暮らす私たちの暮らしが海外の生物多様性に及ぼす影響をいかに低減・配慮していくべきかという視点から調査・普及啓発活動に取り組んでいる。

報告

みしばじゅんいち
三柴 淳一
フェアウッド・パートナーズ（認定NPO法人FoE Japan）

登壇者の発表

田子 英司さん

変わりはじめた「山」のお話として、いわき市森林組合の田子さんに講演いただいた。田子さんはこの道35年の自伐林家で、平成25年3月から組合長を務めている。福島の林業について、丸太価格の低迷を理由にしているだけでは未来はなく、林業の現場自らが変わらなければならない、との強い危機感から、森林組合職員に「高性能作業機械を導入しながら、森林所有者に何も還元できないのはおかしい」と呼びかけたそうだ。そして作業効率の向上による伐採コスト低減を図り、森林所有者への還元率を高めることで、彼らの割高なコンテナ苗購入代金捻出を促し、再造林率の向上を達成した。

また「今は福島再生事業など特需景気だが、今後、森林組合は何もせずにやっていけるのか」とした周囲への問いかけを続けることで、生産材の市場価値向上や他生産地との差別化を目的に、森林認証の取得を実現した。

そうした“熱い”取組みは若い人材の確保にもつながっている。「ハーベスターに乗りたい」として林業を志向するものの、きつい真夏の下刈り作業などの壁を乗り越えられず辞めていく若者が多い中、近年は若い意欲のある人材が森林組合に増えているようだ。

福島の状況はまだまだ厳しいものがあると思われるが、田子さんの挑戦はまだまだ終わらない。

田子 英司さん

大野 航輔さん

「ひと」の視点から「自然と人の結び直し」をテーマに（株）リトル・トリーの大野さんに講演い

ただいた。大野さんは5年前に道志村に移住し、地域おこし協力隊の任期終了後に起業した。講演は「社会とか自分の人生とか、未来に希望が持てるのか?」、「プライベートと仕事のバランス、そして自分の仕事が社会に役に立つものであればいいな」との問いかけから始められた。

都会と田舎との比較では「“都会にあるものは田舎にない”、ではなくて“田舎にあるものは都会にない”」と、田舎に価値を見出し、東京で働いてきたときより確実に幸せだと言う。一つは「アフター5焚き火」。庭先で焚き火をはじめると自然と人が集まってきて語らいの場になり、気がつくと夜中の3時くらいまで、ということもあるそうだ。

大野 航輔さん

大野さんは「中山間地は宝の山でこの資源を活かさない手はない」と力説。リトル・トリーが取組んできた林地境界の確認については「林業をする上での絶対条件で、これをやらないと林業の未来はない」とし、その仕事がしがらみのない移住者の新しい仕事にふさわしいと考えているようだ。また各地で課題になっている搬出の問題も、大野さんにかかると「一番面白いもの」に。ロッククライミング好きを生かし「ギア」を駆使した知恵と工夫で低コストでの出材を実現している。林業&田舎に「楽しさ」を見出した大野さんからは多くを学ぶことができる。

鈴木 正樹さん

「まち」の視点からは、北海道で製材、集成材、プレカットを幅広く手がける（株）ハルキの鈴木さんが取組んでいる病院木質化をはじめとする施設や空間の木質化について講演いただいた。鈴木さんはお子さんが生まれたのを機に埼玉から移住して、北海道発の木育マイスターを取得。日本全国スギダラケ倶楽部の影響などもあり、木質化業務を手掛けるようになった。

函館空港の遊具施設の木質化を手掛けたきっかけも「木育」。木育イベントとしてフラワーアレンジメントを函館空港で開催した際、600人もの参加があり、好評だったため業務受託につながったようだ。小学校の机の天板交換イベントも「木育」を目的に企画し、教育委員会から「休みの間にかえておいてくれ」との反応に対して、最後は社長と鈴木さんとで町長へ直談判し、材を寄付する条件でイベントを実現したそうだ。

病院の木質化は多くの関係者を巻き込みプロジェクト形式で進めてきた。木材の「香り」によるよい効果も期待される中、看護師さんからの意見では「患者さんは気にするかも」、「認知症の方には節

鈴木 正樹さん

が〝目や虫〟に見えるのでは?」など、根強い懸念の声があったようだ。さまざま試験により、木材は「ビニールクロスと変わらない」という結果を得て、実現にこぎつけたのだった。

函館をもじった「ハコダケくん」キャラクターの生みの親の鈴木さん。次の企画に期待したい。

執筆者の感想

各講演者とも、初日のキーワードである「関係人口」を講演の中に上手く取り込み、森林と市民とが自然とつながった感じの雰囲気が醸成されていたのがとても好印象だった。

元々の地元で長く林業を続ける林家の田子さんが従来からの課題をどうにかして克服していこうとする取組み、移住者の新たな視点から林業や田舎を捉えなおしている大野さんの取組み、そしてそうした努力によって搬出・市場供給される木材の新たな使途を開拓している鈴木さんの取組みは、それぞれ「サプライチェーン」によってつながっており、その全体を通して「変わりはじめている」ことを実感できる分科会だった。

学生レポーター報告

飯塚 悦司
（東京農工大学　農学部環境資源科学科）

発表者

田子 英司さん

森林認証を取った経緯と林業の就業人口について、ご自身の経験から話していただきました。森林認証を取ることで、木材に付加価値をつけ、安定した職場を創出することで、若者の就業人口が増えるのではないかと、考え、取得した。こうした取り組みに加えて、地域の小学校への環境教育、消防・警察への技術指導等によって、森林との関りをつなぎ、林業の現場に入らずとも、関りを持ってくれるような取り組みについての話もあった。

大野 航輔さん

山梨県道志村で薪ボイラーでの銭湯を運営することで、水源の森以外の管理不足の森の木を使うことを目指した。これにより、お金が村内で循環し、雇用が創出できた。ここを起点に、道志村移住者への支援（「関係案内所」に相当？）を行った。さらに、林業についての話もあり、林業は知的労働で、機転さえあれば、小規模でも効率的にできる。また、境界調査の問題もよそ者の自分らであれば，山主さん同士のもめ事になった場合でも、間に入りやすいのではとの話もあった。

鈴木 正樹さん

木をどう使うかの話が主で、木育マイスターとしての環境教育活動、病院の木質化といった木の強度ではなく、質感に着目した取り組みについて話があった。木育マイスターとしての取り組みは木育とは何かから始まり、地域の小学校の机を児童と一緒に地域材を使って作る、木質の室内遊具開発といった実際の取り組みについて、一方で病院の木質化については、いかにして、患者が心地よく，それでいていかに病院の現場での利便性を求めるかについて話があった。アンケート調査から、ウイルス・細菌、消毒に対する木材の影響まで幅広く行い、実際に木質化した病室もあるとのことだった。

参加者

印象に残った発言

- 大野さんに薪ボイラーは実際に経営が成り立っているのか、質問された方がおり、その話の中で、補助金がないと厳しいという話がなされていた。
- コンテナ苗の普及がなかなか進まないが、森林組合での取り組みについて質問された方がおり、その解答として、広がってきてはいるが、少花粉苗の生産体制は整っていないと田子さんから話があった。
- 大学生から、木育を仕事にできるかどうか、将来的には，イベントと木製雑貨の店の二つで生活するのが目標との発言があった。鈴木さんはそれに対し、単体の仕事としては、現状厳しいが、ゆくゆくは成り立たせていきたいという発言があった。

コーディネーター

まとめ的な発言

今の森林の利用が，木材の利用から変化していて，森から出てくる木材を流通に沿って利用している方や，森を使って木材以外で生活している方などがいる。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

- 森を“活かす”と聞いたとき、私はCLTや難燃性木材、セルロースナノファイバーなどの木質を利用した先端技術を想像してしまっていた。しかし、よくよく考えれば、木材はその木目や色の美しさ、匂いなどの金属やプラスチックにはない特徴がある。これを活かすには室内木質化や木育だろう。これら二つは、木を森にかかわりのない人に伝え、森に対する関係人口を増やすことができるのだろうなと思いました。
- そして、この森に対する「関係人口」の創出といった観点で、木材利用とは異なる側から，田子さんや大野さんの取り組みもあるのだろうと思いました。
- SDGsという言葉が広まりつつあり、〇〇番はこの事例に当てはまるというような話も聞きます。しかし、どの番号にしても、物や人が循環するような社会を作り、犠牲者を生まない、持続可能な社会を作ることに共通点があると再認識しました。
- 私自身の専門は木質解剖学という、樹木の細胞や年輪、成分を細かに観察する分野です。この社会の循環を成すには森や樹木について知り、その新たな利用を模索する必要があると、この分野にいて、日々思います。近頃は、技術は社会にとって良くないものという風潮もありますが、薪ボイラーにしても病院の木質化にしてもそれらは技術にほかなりません。自分は今後の森と、常により良い森と樹木の活かし方を模索し、その健全な活かし方について伝えるような取り組みを行っていきたい。

学生レポーター報告

成田 陸
（東京農業大学　地域環境科学部森林総合科学科）

発表者

田子 英司さん

被災地である福島の現状の話でした。

その中でも管理体制と施業の変化が訴えられました。管理体制→丸太、製材品ともに何重のチェックしているため安心である。施業の変化→高性能林業機械を中心とした施業へと変更していかなければならない、他の施業も併せて変化していくべき。

大野 航輔さん

常に未来への希望の幸せが中心にありました。その中でも林業がチャンスという話と、都会と田舎の違いがという話が象徴していると感じました。

林業がチャンス→森林資源の充実と、活用方法の多様化。今までの林業の停滞が逆にチャンスとなっている。

都会と田舎の違い→田舎にないものが都会にある、都会にないものが田舎にある。都会と田舎は表裏一体の関係。

鈴木 正樹さん

木と一般の方との関係性の話でした。その中でも小学校と病院の話が際立っていました。

小学校→天板交換プロジェクト。この天板の木がどこから来て、どうように加工されここにあるのかを話すことで、子どもたちに愛着を湧かせ、大事にする心を育む活動。

病院→病院の内装木質化。前例がないプロジェクト、それは細菌やアルコール消毒の影響がわからないため。大学で実験→中央病院の産婦人科にて成功。

参加者

印象に残った発言

- 森林の境界線について。境界が分かるためには足繋に地域の森林に通うこと、これが何よりも重要である。もし分からないようであれば、役場に行くなどして森林簿を貰う、航空写真を利用するなどが必要。
- 持山に魅力が持てないのは、木材価格が上がらないため。木材の値段が㎥当たり１万円前後は、世界基準であるためなかなか変わらない。その中でコストをいかに下げていくことが大事。
- 木育の活動は仕事になるのか。木育発祥の地北海道でも「ならない」の一言。逆に仕事になるようだったら教えてほしいとのこと。

コーディネーター

まとめ的な発言

今森林資源の活用形態が、従来の木材資源としての活用から、エネルギー利用をはじめとする様々な活用方法が出てきており、その活用方法が森林にどのような影響を与えているかということを考える。その川上から川下の流れ（サプライチェーン）を話されました。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

- 総じて感じたのは、森林資源活用方法が変化してきており多様化してきている。それは求められているものが、グローバルとローカルに際立っているように感じた。グローバルレベルではSDGs達成のため、サプライチェーンなどを求められること、ローカルレベルでは地域資源として改めて見直され、産業として期待されていること。
- 自分自身は、森林への関わり方がこれだけ多様化しているため、林業としての森林をはじめ、観光、エネルギーとして森林の多様性に触れ続け、それを様々な方に伝えていきたいと改めて感じました。

都会から山村に向かった人だけでなく、地域にいる人が支援することによって、それが両輪となって山村が動く。両方がうまく行っている事例、地域資源が活かされる事例などについて、自然と共生する山村の暮らしの現代的価値を見出し、ライフスタイル発信、持続可能な事業化に第一線で取り組む方と語り合います。

あおきゆか
青木 優花
焼畑蕎麦苦楽部（宮崎県椎葉村在住）

広島県出身。自然・生態系への関心から、実際に自然に囲まれた暮らしをしたいという思いを抱き、宮崎県椎葉村の魅力に引かれ、2015年に移住。地域おこしグループ「焼畑蕎麦苦楽部（そばくらぶ）」のメンバーとなり、古来より続く焼き畑の保存伝承に関わっている。山里の知恵や生活文化を吸収しながら、人と自然とが密接につながった暮らしを実践している。

ふくしまじゅんぺい
福嶋 淳平
有限会社きたもっく 森林活用事業部 取締役
http://kitamoc.com

1980年千葉県千葉市生まれ。2002年有限会社きたもっく入社。2004年株式会社ピカの勤務を経てシステム会社を設立。2009年きたもっくの発展期に軸足を群馬県北軽井沢に移す。2010年冬の寒冷地の楽しみ方の提案から薪ストーブ施工販売事業を立ち上げに携わる。2015年薪の自給事業の立ち上げを行い、2017年より森林資源活用事業として、森林の6次産業化に挑戦中。

コーディネーター

しまだしゅんぺい
嶋田 俊平
株式会社さとゆめ 代表取締役

京都大学大学院農学研究科森林科学専攻修了後、環境系シンクタンク勤務を経て、2013年に株式会社さとゆめを設立。「ふるさとの夢をかたちに」を合言葉に、資源探しから商品開発・販路開拓まで、トコトン地域と伴走するコンサルティングを行う。物語マーケティング手法を活用したワークショップのファシリテーションなど、多くの地域住民、事業者を巻き込んでの「地域住民による地域のための計画づくり」に力を入れている。主な著書には、「森林ボランティア論」（共著、J-FIC）、「火のある暮らしのはじめ方」（共著、農文協）、「星が降るとき～3.11後の世界に生きる」（共著、New Pacific Press）等がある。

報告

やまぎしたかお
山岸 貴生
特定非営利活動法人地球緑化センター　事業部長

登壇者の発表

第3分科会「暮らす」では『山村の価値を世界に開く』というテーマで、ゲスト2名の事例発表と参加者を交えたグループワークを行った。
最初に、自然と共生する山村の暮らしの中に現代的価値を見出し活動している2名からそれぞれの取り組みを聞いた。

青木 優花さん

青木 優花さん

青木さんは自然に囲まれた暮らしがしたいという思いから椎葉村に移住。今年で4年目になる。焼畑の師匠とも呼ぶ椎葉クニ子さんと出会い、焼畑継承会「焼畑蕎麦苦楽部（そばくらぶ）」のメンバーとして焼畑やソバ収穫を中心に活動している。自然界との深い関わりを持った椎葉村での暮らし、営み、仕事を多くの人に紹介したいと、イベントとして焼畑を行っている。また昔ながらの道具を使った農業体験や加工品作りを実施し、村で受け継がれてきた山村での暮らしの知恵を次世代につなげる活動も行っている。

福嶋 淳平さん

浅間山の北麓を拠点にしながら自然との持続的な関係を作っている。キャンプ場「スイートグラス」では薪ストーブを導入。通常、厳冬期はマイナス20度近くまで気温が下がることから、あまり集客を見込めない時期なのだが、この季節でしか感じることができない火の温もりをキャンプ場全体で表現したところ、通年での集客を可能としている。また、薪を自社で生産する取り組みにも着手。自動薪割機やボイラーの導入により安定した薪の供給システムを構築している。地域の資源を価値あるものに

変えていくことで、地域の山と豊かな関係を築こうとしている。

福島 淳平さん

参加者と話し合い

嶋田 俊平さん

続いてコーディネーターの嶋田俊平さんを交えて青木さんと福嶋さんとのクロストーク。はじめに嶋田さんが二人について「両極端な面がある二人を事例発表として話していただきましたが、共通して話していることもあった。それは、山や木というものをネガティブなものと捉えるのではなく、価値のあるものとして見ている点。そして、二人ともそのことを発信している」とまとめた。二人に共通している考え方は「お金になることをする」のではなく「やりたいことをしてお金にする」ということ。そして嶋田さんから「焼畑は急斜面で行っている。キャンプ場も冬の寒さを売りにしている。一般的にはネガティブと思われがちなところに価値を見出すようになったきっかけどこにあるのか」と問いかけがあった。それについて福嶋さんは「キャンプ場を経営していくうちに、だんだんと火が持っている暖かさや特徴が分かるようになってきた。火には、人間が持つ本能的な感覚を呼び覚ます効果もあると思うようになって、だったら寒い冬なら火の楽しさを一番体感できるんじゃないかと思うようになった」と話す。

左から嶋田さん、青木さん、福嶋さん

椎葉村に移り住んだ青木さんも「自分の遺伝子が求めていた」と言う。もともとは都会暮らしだったが、あまりに自然と断絶した暮らしをしていたので、暮らす場所を変えてみたいと思い椎葉村に移り住んだ。ただ当初は、椎葉村の人のなかにも「焼畑は原始的な文化だから恥ずかしい」と思っている住民もいたそうだ。そんな焼畑に惹かれたのは「私の感性が求めていた」からだと青木さんは話す。古来より絶えることなく続く焼畑の文化は、時代とともに品種改良を重ね、はるかに洗練されたものになっている。福嶋さん同様に、青木さんは火の魅力も大きいと感じている。自然の物が燃えた後

に立ち込める煙には心をホッとさせる、ある種の心地よさもあるという。「人間は、つねに火を身近に感じながら、火と共に生きてきたんですね。その感覚を私の遺伝子は求めていたと思う」と話していた。

また参加者からも質問を受け付けたところ「仲間集めや次世代へのつなぎ方を教えて欲しい」との問いかけがあった。福嶋さんは「仲間集めという点では、やはりこのような機会で外部に向けて色々と情報を発信をしていくことで、シンパシーを感じる新しい仲間が集ってもらえればいいなと思っている」と答え、青木さんは「特に具体的なことはしていないが、自分が楽しいと思える暮らしをしていると自然と周りに人が集まってきているように感じる。椎葉自慢、焼畑自慢、自然界で私がどれだけ救われたかと楽しく語っていることが人と人をつなげているのではないかと思う」と答えた。その後は会場からもお金との付き合い方や、地域の中での暮らし方などについても質問が出た。

その後は参加者を4つのグループに分けてグループワークを実施。事例発表の2名の話を受けて関係人口の作り方などについて議論し、最後には事例発表者を交えた全体議論を行った。

グループワークの様子

その中で出てきた意見としては、二拠点居住のように都市と地方を行き来する場合は、やはり時間と交通費が課題となっている点。また地域と関わりたいと思ってもなかなか情報を集める手段がなく、どこで、どんな人に来てほしいのか、何をしてもらいたいのか、といった情報が掴みづらいという意見も出た。

執筆者の感想

前日の基調講演でも話題になった「関係人口をつくる」という観点からも、都市部で暮らしている人が地域と関わる際に大事になるのは、その地域での“居場所”ではないかと思う。都市に暮らしていても将来的には地方で暮らしたいと考えている人もいる。また暮らすまでではないものの、地域と関わりたいと願っている人もいる。ただ、どうやって地域と関係を持てばいいのか分からない人も多いのではないだろうか。また自分が居てもいいのだという“居場所”や安心感も大切なのではないかと思う。情報の提供方法を含めて安心して地域に入り込める環境整備も今後の課題になるのではないかと感じた。しかし、最後はやはり“人”ではないかと改めて感じた分科会でもあった。

事例発表をしていただいた青木さんと福嶋さんは、よそから訪れる人に居場所を提供し、仲間を集め、次世代につなげていくということを既に実践されている。自身の活動や会社の取り組みを話す姿がとても生き生きと、そして楽しそうにしていたのが印象的だった。「この人がいるからこの地域に」という理由で地域と関わる人も多くいる。青木さんは「鳥インターネット」と表現しているが、既存のメディアやインターネットも大切だと思うが、やはり楽しそうにしている人には自然と人が集まる、と二人の話を聞いていて強く感じることができた。

学生レポーター報告

野口 航一
（東京農工大学　農学部地域生態システム学科）

発表者

青木 優花さん

焼き畑は縄文時代から受け継がれてきた技術であるため、その手法や残存する種子は非常に洗練されている。高齢者の山暮らしに関する知識は非常に価値がある。椎葉村の暮らしを好む人がいるように、都会の暮らしを好む人がいるのも自然である。

福嶋 淳平さん

山は木を育てるためだけの場所ではなく、他にも多くの価値をもっている。山を価値化する産業を地元の人以外が担うことは難しいが、山の持つ価値を可視化すること、また、純粋な利益ではなく、生活できるだけの収入に満足することで、山でビジネスを行うことは可能である。

参加者

印象に残った発言

- 山村に移住をしようと思っても、現地に住む人とのコネクションがないと現実的には難しい。手に入る情報も少ない。
- 仕事や人間関係も移住の障壁になることが多い。実際に移住が可能なのは金銭的に余裕のある人か、翻訳家、フリーランスのエンジニアなど所在に縛られず働ける立場の人だけである。
- 移住者と受け入れ側のミスマッチを防ぐためには、受け入れ側が抱える問題点、特に「なぜ関係人口が必要なのか」を双方に周知しておく必要がある。こうすることで、山村の地元民による移住者の拒絶や、移住者の山村の暮らしに対する誤解を減らすことができる。

コーディネーター

まとめ的な発言

林業においてだけではなく、世界全体として「お金になることを仕事にする」のではなく、「自分の好きなことをマネタイズする」という動きがある。山村への移住は、移住そのものが目的になってしまっていると成功しにくい。自分のやりたいこと、成し遂げたいことを明確に持ったうえで、山村への移住はその手段に過ぎないことを念頭に置く必要がある。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

- 山村に移住して積極的に活動している人が都会的な暮らしに大きな理解を示していることが印象的だった。
- 今後、私は都会に住んでいることを活かし、山村移住を検討している人やまだ知らない人に対して移住という選択肢があることやその暮らしの様子を伝えていきたい。

インターネットを通してさまざまな情報を簡単に知ることができる今、そうした媒体では伝えることができない、森や木のぬくもりにふれる大切さが見直されてきています。「森林環境教育」は森と人との関係をより良いものへと変えていく方法の１つです。子どもたちの情操教育につながる自然体験や森林体験。森が最適な教材であり教育現場だととらえ、その最先端で活動されている方々をお招きし、事例やこれからの課題、そして森林環境教育のさらなる拡がりについて考えます。

たかはしきょうこ
高橋 京子　ウレシパモシリ　-保育と自然をつなぐ研究会- 主宰
http://ureshipa.jp/

自然保育コーディネーター。ウレシパモシリ～保育と自然をつなぐ研究会～を主宰。欧州への視察や保育園・幼稚園における自然あそびの実践をとおして得られた知見をもとに、都市の保育環境でもできる、身近な自然の素材を活かした遊びを創作。子どもの五感を刺激し、感性を育むことの重要性や、多様性を持つ自然が子どもの多様な育ちを支え、自己肯定感を高めることを、広範囲の研修会・講演・雑誌等で伝えている。著書に「決定版12か月の自然あそび87」（新星出版社）がある。

たなかそうじ
田中 惣次　田中林業株式会社 会長
http://www.tanaka-forestry.co.jp/

昭和22年3月4日生まれ、71歳。日本大学林学科卒業。昭和44年卒業と同時に自営業として行っている林学の現場で働き、現在に至る。山の後継者育成にも力を注いでおり、東京都指導林家、檜原森林塾主宰、林業人材育成支援普及センター代表理事なども務めている。著書に「私は森の案内人」（創森社）「本当はすごい森の話」（少年写真新聞社）などがある。森のデザイナーと称して、100年、200年後のおしゃれな山づくり（混交林）を目標に「総合的森林業」として取り組んでいる。

なかだてこうた
中楯 浩太　世田谷区立等々力小学校 教員

社会科教育連盟や東京都・世田谷区小学校社会科研究会等に所属して、社会科教育を中心に研究を進めてきた。子どもに知識を教え込むのではなく、子どもの関心や疑問を大切にした「問題解決的な学習」の展開と教師が楽しく学び合える組織づくりに力を注いできた。5年の森林の学習では、実際に青梅の森に数回入って、体感的に学び、その重要性を実感。現在は、持続可能な農業・水産業・林業と教育の連携と小中高の社会科の接続に取り組んでいる。

コーディネーター

いのうえまりこ
井上 真理子　国立研究開発法人 森林研究･整備機構
森林総合研究所 多摩森林科学園 主任研究員

東京都出身。博士（農学）。日本学術会議連携会員。東京都桧原村での山仕事体験キャンプ（指導：田中惣次氏）参加をきっかけに、農学部林学科へ進学。東京都高等学校の農業教員（林業）を経て、研究者に転職。専門は森林教育。著書に「森林教育」（海青社）、高等学校教科書「森林経営」などがある。

報告

なかじまだいすけ
中島 大輔
自伐林家／NPO法人 青梅林業研究グループ

登壇者の発表

高橋 京子さん

幼児教育・保育の基準となる3法令に明記された、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿。「自然との関わり・生命尊重」という項目も含まれ、今後ますます保育現場と自然との関係は深まると予想されるが、都市部では、子どもと自然とをどのようにつなぐかが課題となる。課題解決の事例として、林業家の協力を得て木を丸ごと一本園庭へもちこみ、教材にする活動や枝葉や幹の匂いや感触を楽しみながらの分類遊び、普段の遊びを道具ごと森へもちだし、木の実や葉を食材に見立てる遊び等、日々の保育に森をもちこみ、保育を森へもちだす事例や保育環境づくりの取り組みが紹介された。実践する際には、指導者が楽しむ姿を子どもに見せることや小さなリスクを解決する工夫を考えることが大切である。

中楯 浩太さん

小学校社会科では、第4・5学年に「森林」を扱う単元がある。しかし、他の産業学習よりも人の思いや工夫・努力が見えにくく、浅く扱われがちであり、「森林」が身近でないために、先生の関心

が低い。平成30年2月23日に行われた東京都小学校社会科研究会での自身の取り組みをもとに、授業を事例として紹介していただき、「子どもが問題意識をもち、意欲的に調べ、友達と考える学習（問題解決的な学習）」を通して、いかに「森林の問題」を自分事として捉えられるようになるかを参加者一同で体験した。「森林」と「授業」をつなぎ、関心がない状態＝「無価値」から「価値」を生み出すためには、公教育と森林とのこれからのつながり方を自分たちで考え行動に結びつけることが大切ある。

田中 惣次さん

昭和35年の燃料革命や、昭和39年に始まった木材の自由化により、昭和55年をピークに木材の経済的価値はなくなってしまったように思われる。人々の暮らしも、山村で働く一次産業から、街で働く二次、三次産業へと移り変わり、山村の人口は減少。そんな中、都市と山村の関係を復旧させようと行動する都市住民と林業家である田中さんとの活動が、後に森林ボランティアと呼ばれるようになった。活動の輪が広まり、今回22回目を迎える「森林と市民を結ぶ全国の集い」にも繋がっている。来年から始まる「森林経営管理法」や「森林環境税」の使い方次第では、日本の山を破壊してしまう可能性もあり、国民一人ひとりの行動によって森が大きく変わっていく。育林は、育人から。機会があれば森に入ってもらい、現場の声を森で聞いてもらいたい。

コーディネーター発言

井上 真理子さん

森林環境教育は実践者が数多く存在し、それぞれが持つ思想の豊富さ故に繋がりが少ないという悩みを持つ。林業体験の実践者と自然観察の実践者では、木を伐ることに対して異なる見解を持っていたり、野外教育の分野では、森の中では子どもたちの五感を十分に発揮させることの必要性など、森を取り巻く様々な分野が存在し、様々な考えや想いを持つ人たちが関わり合っている。地域で生きていくと、自然を守るだけでは生きていけないが、自然の事も知らないと生きていけない。多様な自然への考え方を繋ぐものが森林環境教育ではないかと井上さんは語る。まだ論証されていないが、森林環境教育はキャリア教育、いじめ問題、国際教育、心の教育などにも繋がる切り口を持っていると考えられる。

参加者の発言

- 子どもたちにとっての自然は、天然と人工の区別もそこまでない。
  区別をしているのは大人だけ。
- 今の公教育では段階的な森林環境教育はカバーできてない。
- 木材は身近さがたりない。野菜と違って産地もわからない。
- 何かの際、森林資源を道具にできる経験は、身近になるきっかけ。
- 木の剪定枝を燃すまでの経験が防災教育に繋がるが、簡単に燃せない世の中。
- 様々な現場がある、要は教育ではないだろうか?
  好き嫌い関わらず皆が学ぶ。
- 森林環境教育を授業に入れるには、社会科見学で工場や鎌倉に行くので、森林に行く事にするのは可能では。
- 木材の搬出のために道を作るが、林業のためだけでなく、森に入りたい人が安心して入れるような森の道を意識してつくる必要がある
  しかし、利用する方のマナーの問題は今後大きい。ゴミを捨てる。花を持って行ってしまうなど。
- 大人こそ、変わってもらいたい。子どもを通じて大人も変わっていくことができる。それが森環境教育では。

執筆者の感想

幼児保育現場では、木育や森のようちえんなどの普及により、身近な場所でも、実践者が増加した印象がある。しかし小学校教育現場での、森林との繋がりを学ぶ機会は、一部の教師が取り組んでいる状況であるように思える。率先している人を結び、線を面にしながら、森林環境教育を身近な公教育の一つとして盛り込まれるようにしたい。まだ機は熟していないが、近くまで来ている感じがする。

参加者の声から、森に関わりたいが、関わる方法が分からない方が多くいる。本物に触れる機会を増やすべきではあるが、受け皿としての基盤が整備されていないと感じた。現代の生活において安心・安全を優先するあまり人間の五感が弱くなっている印象も受けた。自然と子どもには、同じものが二つとして存在しない、計画通りにいかないことなど、私が日々の森林保全活動の中で感じる事と共通点を感じた。まずは身近な森林や自然に子どもから大人まで興味を持つ「きっかけをつくる行動」と「繋げる活動」が必要であると考える。そして何より、自分たちも楽しむことを忘れずに。

学生レポーター報告

新井 里菜
（法政大学　人間環境学部）

発表者

高橋 京子さん

高橋さんは幼稚園などにおいて、丸太を園内に持ち込んだり森林に足を運んだりする“もちこむ”と“もちだす”の取り組みを行っている。これらの取り組みによって室内での生活が日常になりがちな園児たちに自然環境と触れ合う機会を与え、子ども自身の豊かな感性と自己肯定感を育てることにつなげているという。自然遊びは学校教育の固定されたカリキュラムのように枠組みの中に子どもたちを押し込むのではなく、予定通りにいかないことを前提に自由な取り組みができることが魅力であるとおっしゃっていた。

中楯 浩太さん

社会科教諭の経験から、教育とは社会とつながり自分の生き方・これからの社会について考えることによって学ぶ意義を実感できるとおっしゃっていた。教える側でも学習する側でも、ある分野について無関心であればその人にとってそれは無価値なものであるというお話にとても共感を持つことができた。特に今回の林業をテーマにした授業を学校で行う場合には、フィールドに赴く体験をして知見を得ることを多くの教職員ができるように林業の現場で働く方々とつながれるネットワークの形成も重要であるという。
そして授業を通して、子どもたちの問題意識を高め、自ら行動し考えることのできる力を育む。

田中 惣次さん

現状では担い手不足や外材の参入による価格の低迷など様々な問題がある中、田中さんにとって林業はバラ色の職業だという。林業体験をはじめとする森林を訪れる体験をすることで、若者や多くの人が林業に関心を持つきっかけを作ることが今後重要であると述べていた。

参加者

印象に残った発言

中楯さんの、特に「無関心＝無価値」というお話が印象に残った。まずは教える側も聞く側もその分野に関心を持って取り組まなければ、学習の効果は薄いと考えたからだ。

「心の中に森を育てる」という言葉がたびたび議論の中で出ていた。林業について理解を深めるためには現場に行って体験することが確かに前提だが、まずはフィールドに直接赴くことが困難な人でも、森林を取り巻く様々なことについて考えてみたり発信したりすることが大切であるという。

コーディネーター

まとめ的な発言

森林資源や地域文化、環境・触れ合いなど分野によって環境教育は教え方が異なるものだが、それぞれの関心に合わせて多様な分野をつなげていくことが森林教育だといえる。木育を専門に研究する方がまだまだ少数の中、今回の分科会では様々な分野に携わる人々や小学生までもが林業について学ぶために参加してくださった。だからこそこれからの林業は明るいといえるだろうともおっしゃっていた。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

森林教育について多くのことを学ぶことができた分科会だった。若い世代が身近な自然環境について学ぶ機会があることで、若者が林業を取り巻く農山村の現状について関心を持つきっかけになると考える。私自身もこの分野に関心を持ったきっかけが小学生時代に受けた環境教育の時間だった。まずは心の中に森林に対する意識を育むきっかけを環境学習によって創出することができれば望ましいだろう。

林業、森林における「関係人口」とはまさにこのように森林に対する関心と親しみを持ち、直接・間接的な方法両方から林業にアプローチすることができる人ではないかと考える。

全体会を通しての所感（初日基調講演を聴講して）

- 林業における関係人口の可能性について学ぶことができた。
- 関係人口がその地域への移住をゴールとしていないことを初めて知った。
- 都心に生活していると見落としがちな、ライフラインの供給システムや精神的なつながり等の“見えない大きなつながり”を知ることが、現代社会の諸問題にアプローチする際に不可欠だと感じた。

学生レポーター報告

山本 みどり
（東京環境工科専門学校 自然環境保全学科）

発表者

高橋 京子さん

「保育」を森や自然にもちだし、自然の多様性の触れることで子どもたちの豊かな感性を育むことができる森の幼稚園の可能性について。

中楯 浩太さん

自ら森林へと足を運び、見て、感じ、考え、それを１日の６時間という限られた授業のコマの中で子どもたちに伝え、今の日本の林業の実態を知ってもらい、共に考え関心を持ってもらうという小学校の教科書には載ってない授業の紹介。

田中 惣次さん

林業に長年携わり、その経験を生かして林業体験や森林ボランティアなどのイベントを開催、現代の若者が林業に関心を持ち関わるきっかけをつくり、林業に携わる人を増やす活動について。

参加者

印象に残った発言

・保育にはゴールがない。

・教育は色々な立場から見て要。決められた時間の中でどれだけ魂が込められるかが大事。

・森に入ってほしい。入らなければなにもわからない。

コーディネーター

まとめ的な発言

こうした会をこれからも開催し、参加して講義を聞き話し合うことによって、未来は明るいと思うと述べていました。

感　想

感じたこと。今後、あなたはどのように森と関わっていこうと思いますか?

私は「将来は、環境教育を通じて自然のいのち美しさ、自然の大切さ、楽しさを子どもたちに伝えたい！」そう考えていましたが、自然から学ぶそれらは需要があるのか。なぜ教育に必要なのか。それらを知って何になるのか。聞かれたら答えられない自分がいました。自然を通して「身につくもの」がわっていなかったのです。

しかし、今回の発表を聞いてそれは「感性」だとわかりました。自然には形がないので「違ってもいい」「違うから楽しいんだ」「人も一人ひとり違うからおもしろいんだ」と子どもたちは思い、感性が育つ。それは自然の多様性に触れるからこそ育めると今回の分科会で聞き、私が知りたかったことはこれで、自然を通して伝えたかったことはこれだと気づくことができました。「自然の多様性に触れ、感性の多様性を育む」私はそういった活動をして、自然、森の大切さを伝えていきたい。それが今の自分、これからの自分にできることだと思いました。

関係人口について

基調講演で初めて「関係人口」という言葉を知りました。聞いたこともない言葉で、聞いても理解できるか不安でしたが、それはとてもシンプルなものでした。

「その地域に住んでいない人でも、その地域に関わりを持ち、共に地域おこしをしていく。それも見返りがないボランティアではなく対価がちゃんとある平等な関係で。」

現在、地方で少子高齢化が進むこの日本で今一番必要なことではないかと思いました。しかし、どうしてもその平等関係は、どこかでどちらかが求めすぎてしまったとき崩れてしまうのではないかと思いました。「互いに求めず、求めすぎない」「互いに何があっても感謝の言葉を言う」「互いにちゃんと関係人口という言葉を理解しておく」これがこの関係人口を上手く築き、長持ちすることができるキーワードではないかと思いました。そして、その関係が上手く築けた時、少子高齢化のなか消えつつある日本の伝統文化や荒地化する里山の問題など、日本の歴史と自然を守るということに繋がるのではないかと思いました。

内山 節　実行委員長

人々は、どのように森林を管理し利用し、どのように地域社会をつくってきたのか。たえずふり返りながらすすみたい。

江戸時代以降、明治大正昭和平成へと、「いろんな問題はあったけれど、いい方向に向かってきていて社会は着実に発展してきた」。私たちは、そうした歴史を教わってきました。しかし、いまその歴史観を問わざるを得なくなっています。

幕末に黒船でペリーが日本にやってきた頃、日本とアメリカのGDPにどれくらいの差があったのでしょうか。正確な統計があったわけではないのですが、専門家が推計したところによると、「ほぼ同じではなかったか」ということです。

当時の日本には軍艦がなかったけれど、江戸期の日本の民衆の作り上げてきたGDPの総量はかなり大きなものでした。GDPだけを見れば、あのときの日本はそれほどあわてなくても良かった（笑）。

それが、昭和16年に日米戦争をはじめた頃のGDPは1対10の差がありました。もちろん、戦争は勝てばいいというものではなく、戦争自体が悪ですが、この差があっても戦争を始めるのはあまりに無謀です。

このことから見えてくるものは、明治になって殖産興業・富国強兵がすすめられますが、あの歴史は大失敗していたということです。つまり、国力を伸ばして欧米に追いつけといいながら、実のところは失敗してきた。

なにを失敗したのか、その理由はどこにあったのか。それは、これからの課題でもあります。

ひとつは、当時の殖産興業が財閥を中心としたゆがんだあり方だったこと。もうひとつは、江戸期までの民衆が築きあげてきた生産力を基盤とし、そこに新しいものを入れていくという努力をまったくしなかった。古いものをただ壊して西洋のものを入れるという方法をとってきた。

つまり、そこの風土のなかで育まれてきたものを使って来なかった。

じつは、林業を含めて森林でも同じことが言えます。歴史的に、森林の管理の仕方、利用の仕方、維持の仕方などは各地域でいろいろな形での蓄積がありました。たとえば、林業的にいえば、江戸中期から人工林づくりは始まっていて、紀伊半島や九州・日田などで大規模に活発に行われていました。

そして、東京のこの四谷あたりも林業地でした。それがある時期から杉並あたりに林業地が移ったのですが、それでも名称は「四谷林業」と言っていたようです。

ところが、明治期以降そうした日本の歴史的な森林管理や利用などを無視する形でドイツ林学を取り入れ森林管理を行ってきました。けれど、そ

れはいろんな意味で、うまくはいかなかったと私は考えています。

私たちが「これから森林と共に生きていく」ということを考えるとき、もう一度そのあたりをふり返らなくてはならない。もちろん、外国の技術で取り入れるべきものは取り入れるわけですが、その前に、私たちの暮らすこの日本はどういう風土であり、人々はどのように森林を管理し利用して、どのように地域社会をつくってきたのか。これからを考えるとき、そうした姿勢が欠かせないと考えます。

浅草寺では、江戸期に日照りが続くと雨乞いの儀式を行っています。浅草近くを流れる川の源流・秩父に行き、湧き水をもらってきてそれを使って雨乞いの儀式をしています。

この時代、秩父は札所巡りもありましたが、誰もが秩父に行っていたわけではありません。秩父の景色を知らない人の方が多いでしょう。けれど、目の前の川の源流に雨が降り、その水がここまで流れてくる。そうした自然のつながりは知っていた、感じていた。だから、秩父の湧き水をもらって雨乞いをしていました。

目の前に見えている自然だけでなく、自分たちはどういう世界に生きているかを、江戸期は江戸期なりに知っている社会でした。

ところが、いつのまにか私たちは目に見えるものだけしか見えない世界になっているのではないか。このあたりを考えていなくてはいけないのだと感じています。

私たちの先祖は、「暮らしはつくるもの」「仕事はつくるもの」で生きてきました。ところがとりわけ戦後以降、「仕事は雇われるもの」「暮らしは買うもの」に変わってきました。そのツケが、さまざまな形で私たちを圧迫していて問題も大きくなっています。

もういちど、「仕事をつくる」とはなにか、を考えていかなくてはいけないと思います。一人でできることもあるでしょうし、仲間といっしょにすることもある、自然があってできる仕事もあるし、地域があってこそ仕事もあります。

新たな動きにも目を配りながらも、私たちは、この日本の風土は、なにを育んできたのかを絶えずふり返りながらすすんでいくことが大切だと思っています。

学生レポーターによる各分科会報告

次回開催（静岡県掛川市）の挨拶　松浦 成夫さん（NPO法人時ノ寿の森クラブ 理事長）

参加者アンケート

集計総数 96

参加人数　16日:119名　17日:131名
（2日間延べ250人）

性　別

男性	53
女性	43
無回答	0

年　齢

10～20歳代	19
30歳代	16
40歳代	16
50歳代	22
60歳代	15
70歳代	7
無回答	1

「森林と市民を結ぶ全国の集い」参加回数

初めて	60
2回目	10
3回目以上	8
無回答	18

お住いの地域を教えてください

東京都	38
神奈川県	12
千葉県	7
埼玉県	5
茨城県	4
栃木県	2
長野県	2
福島県	1
岩手県	1
山形県	1
岡山県	1
群馬県	2
宮城県	1
北海道	1
山梨県	2
静岡県	7
福井県	1
三重県	2
岐阜県	1
大阪府	1
香川県	2
愛知県	1
カナダ	1
無回答	3

所属など

学生	6
会社員	38
公務員	7
農林水産業	2
自営	18
その他	21
無回答	5

その他の内容

NPO職員3名、大学教授(退職)、森林ボランティア、NGO、林家（だが会社員なので森林に関心が低い）、市議会議員、団体職員3名、団体役員、地域おこし協力隊、無職、休職

参加者アンケート

森づくりや、地域・コミュニティづくりに関わる活動やセミナーに参加していますか。

頻繁に参加している	18
時々参加している	54
参加していない	19
無回答	5

「森林と市民を結ぶ全国の集い」をどのような媒体で知りましたか?

メールマガジン	17
SNS	36
雑誌	0
新聞	0
チラシ	13
知り合いからすすめられて	25
その他	18

1 全体会 | 基調講演について

① 興味深い内容だった	75
② 普通	5
③ 期待したほどではなかった	0
無回答	16

感想

関係人口を増やす活動をしています。大変参考になりました。福島・二本松の情報発信していこうと思いました。

とても面白かったです。関係人口についての理解が深まりました。

関係人口というとらえ方・・・第三の道は現状と課題をふまえての新しい提言でした。都会人もほとんどは地方出身者です。

関係人口という概念を知ることができて良かった。情報社会だからこその層だと思い、情報発信やPRが重要。

「関係人口」という言葉は初めて聞く言葉だったが、今後のや山村振興を考えていく上で、大変興味深く聞く事ができた。とてもわかりやすかった。

とても参考になった。アイデアを盗もう！

関係人口、初めて知ることができてよかった。

“関係人口”という概念が興味深かった。参考になりました。

仲間と森づくりボランティア活動をはじめました。里山所有者の多くは歓迎してくれるのですが、「入るべからず」という方もいます（少数）。まちと村を結ぶイベントの検討をしています。関係人口の広がりを求めて仲間と活動を続けていきたい。

なんとなく知った気になっていた「関係人口」という言葉を理解できたこと、とても良かったです。ただ、話しにもあった通り、この言葉にとらわれ過ぎずに今後も活動していきたいと思いました。

参加者アンケート

関係人口について興味があったので詳しい話を聞けて非常に勉強になった。

所要のため「関係人口をつくる」田中輝美せんのお話のみで帰らざるを得ませんでしたが、大変参考になるお話だったと思います。私も、500ha近い山を所有しており、年に一度春先に戻って生育状況を見ております。「関係人口」の考えに強く興味を覚えました。

定住と観光の間の幅広い窓口の「関係人口」は、最適な表現、伝達、意志の言語と感じました。参加する人間としては、気持ちに手軽に出発できます。何も、枝打ち、伐採ばかりの山仕事だけではなく、簡単な作業等で参加できる人口は増えると思いました。

関係人口という言葉によって、定義化認識の統一ができ、地域の活性化に関して問題解決の糸口になるのでないかと思う。

「関係人口」という言葉自体初めて聞きました。森のことについての関係を持ちたいと思う学生にとって身近に感じられました。

今、注目されている、地域と人とのつながりのあり方の1つだと思います。

「関係人口」、良く理解できました。

「関わりしろ」という言葉に感銘を受けた。

思っていた以上に、関係人口のもつ幅広さ、現代の問題解決のヒントになりました。とても分かりやすく、日本らしい優しい考え方、枠が言葉として世の中に広がっていくことが楽しみになりました。

ぼんやりと感じていたことが上手く言語化されていくようでスッキリとした気分になれました。

少し勇気をいただきました

関係人口という新しい、使いやすい言葉を知ったことは大変良かった。地域には地域の課題があり、大変興味深かった。やはり行政と現場のギャップをどう埋めるかには自分が動くしかない。

2 全体会 | パネルディスカッション

① 興味深い内容だった …… 56
② 普通 …… 14
③ 期待したほどではなかった …… 2
無回答 …… 24

感想

関係人口という切り口だったが、こだわりすぎたのでは。もう少しフリーハンドでお話していただいた方が広がりがあったように思いました。前半の各パネラーの提案報告をもう少し聞きたかったと思います。

もう少し、森林や林業との関係に触れてほしかった。しかし、内山先生のお話を聞くことができて、うれしかった。

関係人口の定義についてあいまいなままで良いというのは面白かったです。

パネラーの話、最初にもう少し長い方が良かった。でも全体のパネルディスカッションの時間が十分にあって良かった。

参加者アンケート

会場がよくなかった。平坦な講義室なのでスライドが見えない。

関係人口に大切な視点、概念を学べっても面白い時間でした。

内山先生、さすがです。

自分自身、将来、森と人、地域と人をつなぐ立場になりたいと考えているので、様々な場でご活躍されているお話を聞けて多くの学びがあった。特に内山先生の「見えないつながり」のお話が心に残った。

関係案内所は必要と本心から思っております。東北震災ボランティアでは、「遠野まごころネット」が、現地とボランティアの間を取り持って助かっております。

様々な視点から関係人口という言葉を通して有意義な意見がきけた。ただ、「森」と「人」のつながりというテーマから「関係人口」という話にシフトしてしまった感じた。

山との関わり合いについての事例が少なかったのですが、内山先生のお話やそれ以外の方々のコメントも大変興味深かったです。

もっと森林にとっての関係人口とはどんな人が？増やすとすれば両者のあり方はどのように変化していくべきかなど、もう少し深い内容だったら良かったと思います。

地域にスポットがあたった内容だと思いましたが、関係人口である人々自身、いろいろな要因から「関わりきれない」など迷い・悩みを抱えている人も多くいると感じています。（答えのない現代で、その多様さに迷ってしまうような・・・。）関係人口側のそうした面も少し意識してもらえるとなと思いました。だだ、地域の人⇔関係人口がフラットな立ち位置なのは、すごく大切だと思いました。

「与える」、「与えられる」ではなく、（一方向でなく）、（能動・受動でなく）それを超えた、「中動態」（西村佳哲さんがよく言ってます）的な関わりになってくるのではと思います。

皆さんの活動のすばらしさ、もっと知りたくなりました。

内山先生の伝統回帰のお話がよかった

色々なひとが色々な立場で森に関わっていることは面白かった。先人たちの素晴らしい事例から、行動すればすすむことに勇気づけられた。

森林文化をどう考えるか参考になった。
森の良さを知らない人たち（潜在者）へのきっかけづくりが重要！

もう少しフロアーとのQAややり取りの時間があると良かった

知らない活動も多く、帰ったら少し深堀りしたくなりました。

初めて聞くことも多く、それぞれがおもしろかった。

関係人口の話と具体的な活動の話は大変参考になりました。森と人と地域とどうかかわるか、色々なアイデアをありがとうございました。

ナリワイの伊藤さん最高でした！ひょうひょうとしながら確信的に。これからも注目しています！

関わり方や受け入れ先もいろいろだな・・・と。もっと広がるとおもしろいと思った。

ムリクリ「関係人口」的な感。まだ馴染んでないのかな。森をテーマにおいてはムリがあった？かみ合ってないような。

参加者アンケート

3 分科会

参加した分科会

活かす	16	育む	5
癒やす	26	その他	43
暮らす	6		

① 興味深い内容だった	47	③ 期待したほどではなかった	0
② 普通	4	無回答	45

感 想

①興味深い内容だった（活かす）
仙台市に住みながら森林セラピーの活動をしたいと思っていますが、県内の森林セラピー基地（登米市）まで、片道車で2時間30分というのがかなりネックになっていました。セラピスト、利用者にとっても体力的に負担が大きい等。タイニーハウス、自動運転などがそういった状態を解決すると思いました。また、都市部でも山間部でもいろいろなプログラムを展開しやすくなると思います。（トイレ問題の解決など）プログラムを長時間化できる。

①興味深い内容だった（活かす）
林業・中山間地域の従来イメージを打ち破る、アイデア・行動力が印象的でした。具体的事例も多く、林業・中山間地での仕事・生活に希望を感じました。多くの都市生活者に森に目を向け、利用する流れが生まれていくよう時代の流れが進み、自分も何等かの形で貢献したいと思いました。

①興味深い内容だった（癒やす）
森というと「林業」という枠から離れた、新しくしかも現実的な森の活かし方。そこを起点にした人生や暮らし方まで視野の広がる内容で素晴らしかった。

①興味深い内容だった（癒やす）
ぼんやりしていた知識に、数多くの役立つ情報が得られました。今日の3つのお題はすべて「時ノ寿の森」で実践予定です。ありがとうございました。

①興味深い内容だった（育む）
現場で活躍されている先生、林業家の生の声を聞けてとても良い分科会だった。

①興味深い内容だった（活かす）
大野さんの言われている移住者だからできること（境界の確定など）具体性があって面白い。

①興味深い内容だった（暮らす）
お話していただいた青木さん、福嶋さんの人生観がよく伝わってきて、これからの自分の生き方を考えさせられた。

①興味深い内容だった（育む）
中楯氏の取り組み、特に都の小学校教員の熱量は素晴らしいと感じました。森に入ることがこれほど人の心を動かすものなのかなと、森林の可能性をとても感じました。

②普通（活かす）
具体的な収益構造についてのお話をお聞きしたかった。

①興味深い内容だった（癒やす）
日本人らしい価値観の視点の気付きや、ハイテクとのコラボの可能性を感じる機会になりました。大きな時間軸、豊かな暮らしとは自分にとって何かをもう一度考えてみたいと思います。貴重な機会を有難うございました。

①興味深い内容だった（癒やす）
「ひと」を中心にした、森との関係性を考えるいい内容でした。「自分に戻る」という人間本来の回帰がきているという感覚をもちました。

①興味深い内容だった（癒やす）
樹木葬について、つい先日友人達と話題になりました。私達40～50代と70～80代との価値観の違いがあります。その壁の問題が解決していく時、新しいものが更に生まれていくのだろうと思いました。よりよいカタチで進化していってほしいです。

①興味深い内容だった（活かす）
木育をされている方の色々な方法について知ることができて良かった。

4 今後の「集い」にどのような内容を望みますか?

各地域の様々な事例。特に失敗事例。

関係が出来るといいので、その感じで！！

内山氏の話を受けて
諸外国に於ける森林と市民の活動
改めてウィーンの森の維持活動やタイでのRe-Greem-Movement（シリントン王女プロジェクト）など、各国の森林と市民の活動の実態と紹介。それらがどのように地域や市民と関わっているかのか・・・。

東京でまたやって下さい。

実際の取り組みの紹介、出来れば失敗事例の紹介、分析、反省などの話が聞けると有意義と思いました。林業の6次産業化の考察、モデルアイデア、ディスカッションをやってみたいですね。

森林環境教育。スギやヒノキのプランテーションとなっている日本の森をどう自然な姿に再生していくか。

森林は危険が増大している。マダニ、カモシカ、イノシシ、私たちの住環境をおびやかしています。関係人口を増やすにも、危機管理が必要であると思いますので、そのような知見も知りたいです。

東京にも森はあると思いますし、せっかくなのでそういうところで開催してはいかがでしょうか。

現場の声が聞きたい。（林業家の課題）
森林環境税のこれからの使途について
森林文化都市の事例、取り組みなど

食べていけるかという実際の問題もあり、そこが皆さんの聞きたいことかと思いましたので、交流会に参加すべきかと思いました。

「森林と市民を結ぶ」がテーマですので、今回のおうに都市の人が森林について新しい視点を持てるような内容を、文化・哲学・アート・ビジネスの領域でも。

これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」

「森林と市民を結ぶ全国の集い」は、各地で活動する森林ボランティア団体の情報交換や課題などを語りあう場として、またより多くの人が森とかかわるきっかけづくりの場として、1996年から開催してきました。今回が第22回となります。

	開催地	日程	テーマ
第1回	東京	1996年 2月16日～18日	市民が支える森林づくり
第2回	東京	1997年 3月1日～2日	「市民が支える森林づくり」の実現をめざして
第3回	大阪	1998年 2月21日～22日	「市民が支える森林づくり」の新たな合意をめざして
第4回	宮城	1998年 12月5日～6日	「市民が支える森林づくり」の新たな活動の広がりをめざして
第5回	高知	1999年 8月19日～22日	山の中で考えよう!「みんなで支える森林づくり」私たちがめざすべきものは何か
第6回	東京	2000年 9月15日～17日	暮らしとともに築く森づくり
第7回	広島	2001年 2月9日～11日	新世紀　森林づくり・地域づくり・人づくり　ーよりよき関わりを求めてー
第8回	群馬	2002年 9月14日～16日	ともに森を治める社会をつくりだすために　森と人と未来のための群馬ビジョン
第9回	北海道	2003年 11月1日～4日	地域に根ざした森林とのおつき合い　森林づくりの現在を理念から行動へ
第10回	東京	2004年 9月18日～20日	森とともに創るこれからの社会
第11回	愛知	2005年 8月26日～28日	森がうごく、人がうごく。そしてネットワークへ。森と人との関係をさらに深める。
第12回	大阪	2006年 11月11日～12日	みんなが創る森づくり　森と共に生きる社会をめざして　～参加から協働へ～
第13回	福岡	2008年 3月8日～9日	暮らしにつながる森づくり
第14回	東京	2009年 12月5日～6日	今、あらためて問う「森林」の価値
第15回	岐阜	2011年 6月4日～5日	裏木曽の森を歩こう
第16回	東京	2011年 10月9日～10日	世界森林アクション・サミット
第17回	島根	2012年 11月2日～4日	神在月に集え!島根へ!　～森林と木を活かす縁結び～
第18回	東京	2014年 3月22日～23日	暮らしとつなげる森林の恵み　～都市の視点から考える
第19回	福島	2015年 6月12日～14日	東北復興に果たす森林の役割と市民活動
第20回	東京	2016年 6月11日～12日	温故知森　～森と私たちを結ぶ新たな道～
第21回	京都	2017年 6月10日～11日	伝統ー森林ー未来へ　～森林と関わる暮らしの歴史を学ぶ～

ソフィアシンポジウム報告

「SDGsの実現に向けて：森の生態系サービスを生かした持続可能な地域づくり」

主催：上智大学大学院地球環境学研究科、上智大学地球環境研究所
後援：上智大学国際協力人材育成センターほか

開会挨拶	**江馬 一弘**（上智大学 学術研究担当副学長）
基調報告1	**ピーター・ベッソー**（国連森林フォーラム 第12期議長） 「グローバルな政策目標の達成のための地域的アプローチ ― 国際モデルフォレストネットワークの20年余の教訓」
基調報告2	**エリン・ケリー**（ フンボルト州立大学 准教授） 「カリフォルニア州における生態系サービスの支払い（PES）のアプローチ ― 森林カーボン取引と森林管理経営・土地所有者にとっての意味合い」
閉会挨拶	**ジョン・ジョセフ・プテンカラム**（上智学院 グローバル化推進担当理事）

2018年6月17日（日）上智大学四ツ谷キャンパス6号館101教室において、来賓を含め450名を超える多数の参加を得て、ソフィアシンポジウム「SDGsの実現に向けて：森の生態系サービスを生かした持続可能な地域づくり」が開催された（2つの基調講演と6名によるパネルディスカッションの二部構成）。当該シンポジウムは、「第22回 森林と市民を結ぶ全国の集い2018 in東京」と同日に同会場において連携開催したことにより、多くの森林保全関係者の参加を得て、盛況のうちに開催することができた。

基調講演においては、国連森林フォーラム第12期議長であったピーター・ベッソー氏より、気候変動、生物多様性、貧困削減および経済成長のそれぞれと森林の関係を説明し、現在森林管理の直面している基本的な課題を概観した上で、世界各地の「モデルフォレスト」における多様な取組を紹介し、森林の持続的な保全のため、包括的なパートナーシップが必要である旨言及した。特に、地元の協力、高度な政策立案者の関与といった一部の人々による参画だけではなく、世界中の多様な人々が何らかの形で関わることが重要である点、その際には、誰といつ、どのように、いつまでに対話をしていくのかに留意することが重要である点を指摘した。さらに、持続可能な地域づくりには、継続的な資金が不可欠であるが、一方で資金が多すぎることも問題であり、適正利用の重要性についても言及した。

ソフィアシンポジウム報告

続く基調講演として、フンボルト州立大学准教授であるエリン・ケリー氏より、カリフォルニアにおける生態系サービス（PES）の一環としての森林炭素取引及び森林管理の現状と課題について説明された。ケリー氏は、カリフォルニア州において導入された、森林炭素オフセットプロジェクトの利用を含むキャップ・アンド・トレード市場の実施状況を紹介したうえで、現在森林カーボンオフセット市場の多くは恩恵を受けているが、森林炭素クレジットをプロトコルの制定を通じて商品化することは困難なプロセスであること、クレジットに「現実感」を伴わせ、また市場はクレジットを「現実のもの」と認識する必要があること、多くの経済的に限界を抱えている土地所有者は、高額な前払金および継続的なコストのために市場に参入してこないことを課題として指摘した。

パネルディスカッションには、ベッソー氏、ケリー氏に加え、ルジラ・ポンプルトン氏（タイ国生物多様性経済公社課長）、温井浩徳氏（横浜市水道局水源林管理所長）、足立直樹氏（レスポンスアビリティCEO）、水谷伸吉氏（more trees事務局長）、井原愛子氏（TAP&SAP.メープルベース代表）らがパネリストとして参加した。パネリストそれぞれが森林管理に関する各取り組みについて報告した後、パネルディスカッションが実施された。

ルジラ氏は、各地で試行しているPESのプロジェクトの紹介を行い、保全区域、保護区域に暮らしている場合、森林に投資をしなければ、悪化の一途をたどるとしたうえで、小規模のパイロット・プロジェクトの実施内容について説明を行った。

温井氏は、横浜市が水源保全の目的で100年以上前に山梨県の道志村の水源地の森林を購入した経緯と、現在の取り組みの現状、および水源林の効果を示すための実験装置のビデオを上映して説明した。

水谷氏は、more treesが「都市と森をつなぐ」をモットーに、カーボンオフセットのマッチングなど国内外で様々な活動を行っている内容について紹介を行った。具体的には、北海道下川町における木材バイオマスを核とした模範的なSDGs実現の取り組みやインドネシアにおけるパーム油栽培による熱帯林とオラウータン生息地の破壊跡地の再生の取り組みについて説明した。

井原氏は、メープルシロップという林産物の活用により、伐採を伴わずとも林業として成り立つことを可能にした取組を説明した。すでに実施を行っている既存林の間伐材を住宅メーカーに専売で購入してもらうなど流通システムの更なる効率化を図り、山主に還元しつつ、かえでの植樹を促進することに言及した。またメーカーにメープルを使用したプリンを全国的に販売してもらうなどの例を出し、森の取り組みを企業と共に多方面にPRする取り組みの重要性を指摘した。

足立氏は、日本企業と生物多様性イニシアチブ（JBIB）の事務局長として、企業の生物多様性保全活動を促進する活動の取り組み状況とその必要性について説明を行った。

ディスカッションでは、ケリー氏に対して、北カリフォルニアにおいて、モデルフォレストを実施する際に対立があったが、現在は和解している

事例がなぜ成功したのか、という問いが発せられたのに対し、ケリー氏は対立していた要因が、木材会社により森林伐採に起因する多様な生物の生息地が失われたことである点に触れたうえで、現在は、そのような森林伐採はなされておらず、環境保護者や森林管理会社などが仲介し、地元住民に共通理解が構築されたことが成功した理由であるとした。この点について、ベッソ―氏は、段階的に森林を伐採する必要がないという認識に変わってきたことに触れた。1990年代初頭までは、デモや暴動などが生じていたが、互いに受入可能なプロセスを採用したことにより、より良く森林管理する方法を学び、建設的な対応を行うことができたことが、森林の価値が高くなった要因だと評価した。

温井氏は、横浜市の水源ＰＥＳの成功と道志村とのパートナーシップが上手くいっている要因を問われたのに対し、道志村に水源管理所を配置していることが、道志村と横浜市の架け橋となり必要な調整が行われていることを挙げた。今後の課題は、村の大半を占める民有林の手入不足であり、森林環境税を活用した取り組みを検討する必要があることを述べた。PESに関連して、飲料会社などによる森林の上流域の買収に関し、PESが効果的な手段となる可能性について、足立氏は、大規模なPESは日本において実施されていないが、現在までにすでに多くの飲料企業は投資を通じて水源林を管理していると説明した。そのうえで、PESが従来収入のなかった主体に対し有効なツールとなる可能性に触れつつ、それら企業は持続可能な森林管理という点は熟慮されているものの、地元住民への還元といった意味ではあまり考えられていない可能性があることを指摘した。この点について、今後政府や自治体からの働きかけも必要であるとした。

また、水谷氏は、下川町が過疎化を食い止め、林業の地産地消に成功した一つの理由として、行政も積極的に関与し、間伐促進による吸収源クレジットの獲得といった、前例がない新しい取組に先駆的に挑戦したことを指摘した。

また、ベッソ―氏は、国連議長として最も難しかった取り組みは何かという会場からの質問に対して、森林戦略の策定を挙げた。FAOや世界銀行など多様な利害関係者がいるなかで、「訴える声」となるための森林に対する目標をまとめたとした。現在、モデルフォレストに対し、多くの国が関心を持ち始めているが、モデルフォレストは各地域で適用されたアイディアの集合であり、それらのアイディアからヒントを得て、地元に適合した形で実施することが成功の秘訣であることにも言及した。

以上（抜粋）のような、生態系サービスに着目する多角的な視点から議論が活発に行われ、最後に、多様なステークホルダーを巻き込んだ「包括的なパートナーシップ」の醸成、そして、「生態系サービスへの支払い」や企業を巻き込んだ生物多様性保全につながるビジネスアプローチなどの本日議論された様々な地道な取り組みが、「持続可能な地域づくり」と「SDGsの実現」につながることをパネリスト一同確認して、閉会した。

実行委員会

赤池　円	私の森.jp 編集長	
石山　恵子	遊学の道Project 代表	
内山　節	NPO法人 森づくりフォーラム 代表理事	実行委員長
小野なぎさ	一般社団法人 森と未来 代表理事	
鹿住貴之	認定NPO法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事･事務局長	副実行委員長
後藤洋一	NPO法人 樹木･環境ネットワーク協会 事務局長	
坂本有希	フェアウッド･パートナーズ（一般財団法人 地球･人間環境フォーラム）	
嶋田俊平	株式会社さとゆめ 代表取締役	
関　友美	NPO法人 共存の森ネットワーク	
高山康秀	日本全国スギダラケ倶楽部	
冨永　茂	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部長	
中島大輔	自伐林家／NPO法人 青梅林業研究グループ	
松浦成夫	NPO法人 時ノ寿の森クラブ 理事長	
黛　友梨	林業女子会@東京	
三柴淳一	フェアウッド･パートナーズ（認定NPO法人 FoE Japan）	
水谷　伸吉	一般社団法人 モア･トゥリーズ 事務局長	
山岸貴生	NPO法人 地球緑化センター 事業部長	
柴田晋吾	上智大学 教授･大学院地球環境学研究科委員長	監事
水野　梓	林野庁 森林利用課 山村振興緑化推進室 課長補佐	オブザーバー
中沢和彦	NPO法人 森づくりフォーラム	事務局
宮本　至	NPO法人 森づくりフォーラム	事務局長

運営スタッフ

宮本　至	NPO法人 森づくりフォーラム
石井春花	NPO法人 森づくりフォーラム
樋口満里	NPO法人 森づくりフォーラム
遠藤紗穂里	認定NPO法人 JUON(樹恩) NETWORK
佐々木俊宙	認定NPO法人 JUON(樹恩) NETWORK

上智大学ほか学生、専門学校生のみなさん

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2018 in 東京」報告書

発行日	2018年8月
編集・発行	「森林と市民を結ぶ全国の集い 2018 in 東京」実行委員会
事務局	**NPO法人 森づくりフォーラム** 〒113-0033　東京都文京区本郷2-25-14　第1ライトビル405 E-mail:　office@moridukuri.jp
編集担当	中沢和彦
編集協力	全体会／一般財団法人 地球･人間環境フォーラム ソフィアシンポジウム／上智大学大学院地球環境学研究科
写真	小森洋昌
表紙絵画	浅野友理子
デザイン	（有）グラム･デザイン

無断転載を禁じます

森林と市民を結ぶ全国の集い 2018 in 東京

facebook「森林と市民を結ぶ全国の集い」 https://www.facebook.com/tsudoitokyo